青木（Aoki）遺跡 2

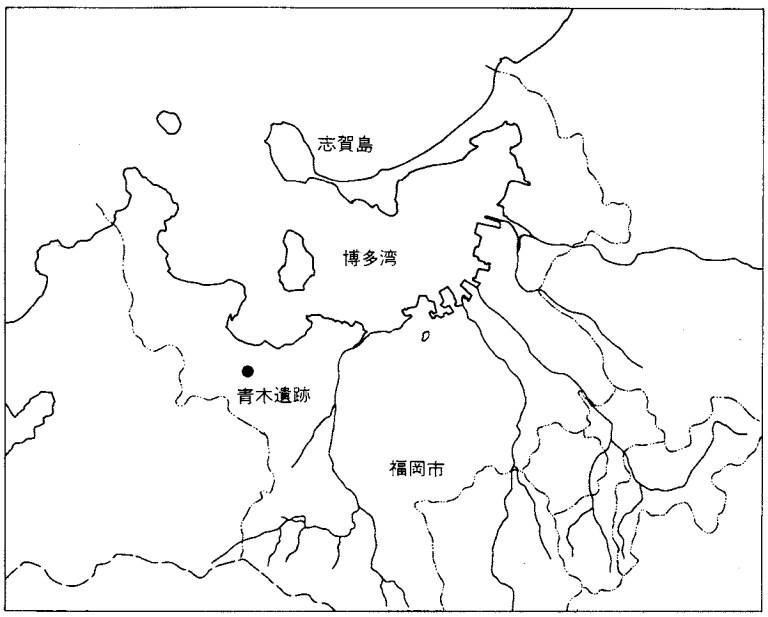
—青木遺跡第 2 次発掘調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第350集

1 9 9 3

福岡市教育委員会

青木遺跡 2



遺 跡 略 号　AOK-2

遺跡調査番号　9013

1 9 9 3

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市西端に拡がる狭長な今宿平野は、弥生時代の石器製作工房跡として著名な今山遺跡や今宿大塚古墳を初めとする12基の前方後円墳が分布し、豊かな自然と文化財に恵まれたところです。

青木遺跡は、この今宿平野の東縁にあります。この一帯には弥生時代の環濠集落跡である今宿五郎江遺跡をはじめ鋤崎古墳・今宿大塚古墳など前方後円墳や須恵器窯の新開窯跡等々弥生時代から古墳時代の遺跡が濃密に分布しています。

今回発掘調査した青木遺跡は、高祖山から派生した舌状の低丘陵上にあり、弥生時代と古代の集落跡を検出しました。第１次調査区と併せ、この地における集落の移り変わりを考える上で貴重な資料となるものです。

本書はこれらの発掘調査成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご協力をいただきました。殊に開発に当たられた株式会社「まるは」の担当者各位には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成５年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井口　雄哉

…… れいげん ……

1．本書は、1990年度に福岡市教育委員会が福岡市西区今宿青木字小畠107番１外において緊急発掘調査した青木遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。

3．遺構は呼称を記号化し、竪穴住居址をSC、掘立柱建物址をSB、土壙をSK、溝をSDと記号化して呼称し、各遺構ごとのナンバーをその後に続けた。

4．本書に掲載した遺構と遺物の実測は小林義彦が行なったが、陶磁器については森本朝子の協力を得た。また、製図は小林と藤村佳公恵が行なった。

5．本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに小林が撮影した。

6．本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管する予定である。

7．本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：9013	遺跡略号：AOK-2	分布地図番号：112-A-7
調査地籍：福岡市西区今宿青木字小畠107番1外		
工事面積：2,449㎡	調査対象面積：1,358㎡	調査実施面積：1,672㎡
調査期間：1990年５月21日～７月３日		

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
1．発掘調査にいたるまで …… 1
2．発掘調査の組織 …… 1
3．立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録 …… 5
1．調査の概要 …… 5
2．弥生時代の調査 …… 7
1)．井戸址 …… 7
2)．竪穴住居址 …… 9
3．中世の調査 …… 10
1)．井戸址 …… 11
2)．掘立柱建物址 …… 12
3)．土壙 …… 16
4)．溝遺構 …… 19
5)．包含層の遺物 …… 22
Ⅲ．おわりに …… 22

挿図目次

Fig. 1．周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
Fig. 2．青木遺跡第2次調査区位置図(1/10,000) …… 4
Fig. 3．調査区周辺現況図(1/2,000) …… 5
Fig. 4．遺構配置図(1/300) …… 6
Fig. 5．弥生時代の遺構配置図(1/600) …… 7
Fig. 6．SE-02・03実測図(1/40) …… 8
Fig. 7．SE-02出土土器実測図(1/3) …… 9
Fig. 8．SC-01実測図(1/60) …… 9
Fig. 9．中世の遺構配置図(1/600) …… 10
Fig. 10．SE-01・04実測図(1/40) …… 11
Fig. 11．掘立柱建物址一覧表 …… 12
Fig. 12．SB-01・02実測図(1/100) …… 13

Fig. 13. SB-03～06実測図(1/100) ……14
Fig. 14. SB-04出土土製品実測図(1/2) ……15
Fig. 15. SB-07～10実測図(1/100) ……15
Fig. 16. SK-01～03実測図(1/30) ……16
Fig. 17. SK-04～07実測図(1/30) ……17
Fig. 18. SD-01～05断面図(1/40) ……18
Fig. 19. 溝遺構出土土器実測図(1/3) ……19
Fig. 20. 溝遺構出土石器実測図(1/4) ……20
Fig. 21. 包含層出土土器実測図(1/4) ……21

図版目次

PL. 1. (1). 調査区全景(北より)　(2). 調査区全景(西より)
PL. 2. (1). SE-02(西より)　(2). SE-03(北より)
PL. 3. (1). SE-01遺物出土状況(西より)　(2). SE-04(西より)
PL. 4. (1). SC-01(北より)　(2). 掘立柱建物址群全景(北より)
PL. 5. (1). 調査区西半部全景(北より)　(2). SB-05・06・08・09(北より)
PL. 6. (1). SB-08・09(北より)　(2). SB-10(北より)
PL. 7. (1). SK-01・02(東より)　(2). SK-03(西より)
PL. 8. (1). SK-04(南より)　(2). SK-05(南より)
PL. 9. (1). SK-06(北より)　(2). SK-07(北より)
PL. 10. (1). 出土土器・石器・土製品

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

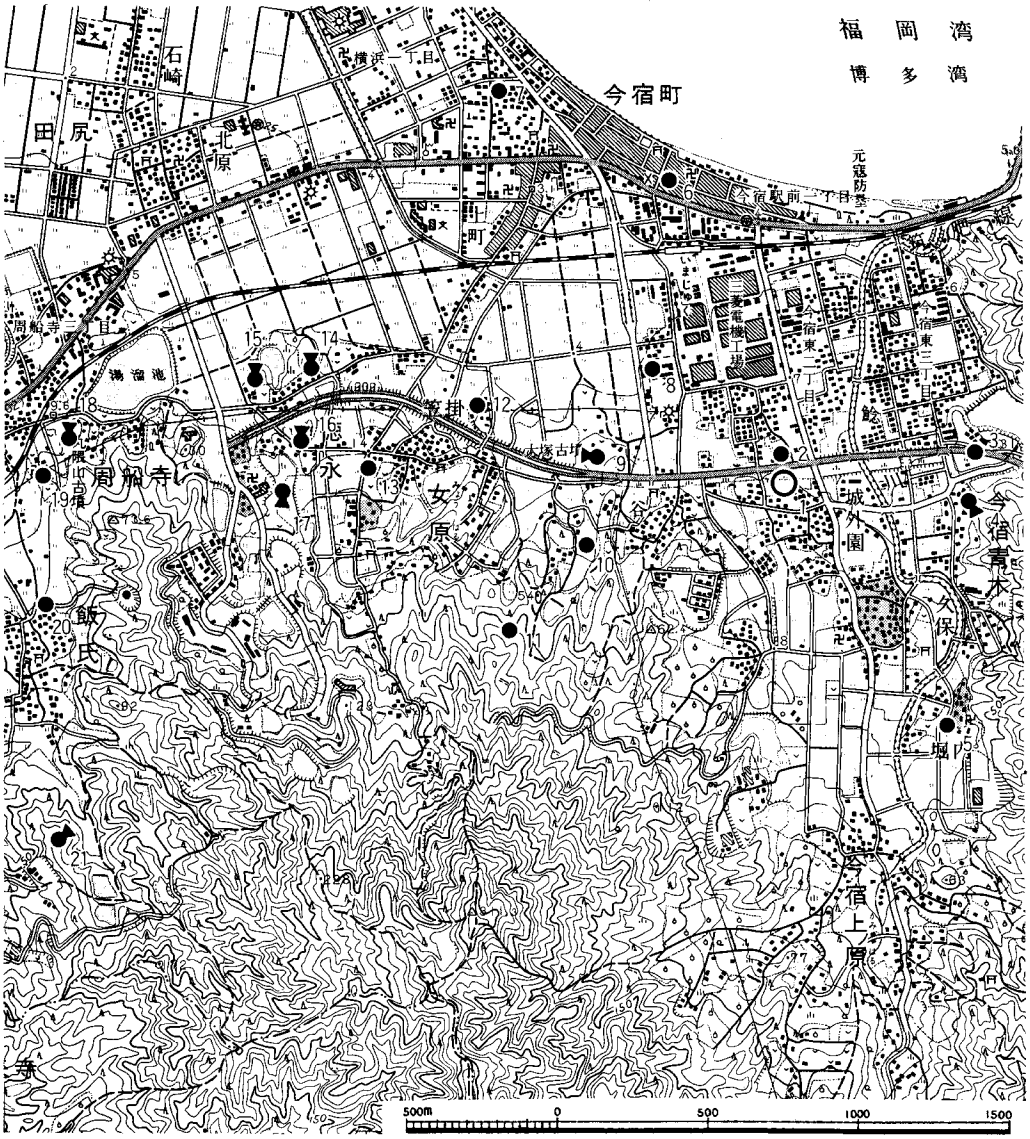
アジアにむかって開かれた九州の拠点都市として発展し続ける福岡市は、人口増加に伴って郊外の市街化が急速に進んでいる。前原市と境を接する糸島平野東縁に拡がる今宿地区も例外ではなく、JR筑肥線と市営地下鉄の相互乗り入れや今宿バイパスの開通を機に田畑は埋め立てられて急速に宅地化しています。

本遺跡のある青木地区には今宿バイパスが開通し、それに伴う沿線の開発は急速に進んでいる。そのバイパスに南接する当地でも利便性を生かした高層の分譲マンション建設が計画され、1988（昭和63）年にその旨の申請がなされた。しかし、申請地は「青木遺跡群」内に立地し、バイパスを隔てた西消防署地内では弥生時代と中世の集落跡が発掘調査によって確認されていることからこれと同時期の集落跡の存在が予想された。このためマンションの建設に先立つ埋蔵文化財の有無確認が必要となり、二度に亘って試掘調査を実施した。その結果、申請地の東端には浅い開析谷があり、谷から西の丘陵上からは遺物包含層と土壙等の遺構が検出され、発掘調査による記録保存を図ることになった。

発掘調査は、1990（平成２）年５月21日に開始し、梅雨期の降雨に悩まされながらも弥生時代と中世の集落跡を検出して７月３日に無事終了した。これも「株式会社まるは」の各担当者をはじめとする関係者各位のご理解と発掘や資料整理に従事された方々のご協力によるものです。ここに記して感謝の意を表します。

2．発掘調査の組織

調査委託　株式会社まるは
調査主体　福岡市教育委員会　埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝　　第一係長　飛高憲雄
庶務担当　第一係　中山昭則　吉田真由美
調査担当　第一係　小林義彦
調査・整理補助　藤村佳公恵
調査・整理作業　尾園　晃（九州大学）　大瀬良省吾　大瀬良清子　海津宏子
川口シゲノ　神崎三喜代　久保喜代子　坂田美佐子　柴田タツ子　田中聖子
土斐崎孝子　西嶋ムラ子　西嶋洋子　馬場イツ子　原ハナエ　藤長幸子
堀ウメコ　松本藤子　村嶋里子　森山早苗　矢富富士子　山下アヤ子
山田トキエ　脇坂チカ　和田裕見子



1．青木遺跡２次　2．青木遺跡　3．鋤崎遺跡　4．鋤崎古墳　5．堀ノ内遺跡　6．今宿横浜遺跡
7．今山遺跡　8．今宿五郎江遺跡　9．今宿大塚古墳　10．大塚遺跡　11．新開窯跡　12．女原笠掛遺跡
13．女原遺跡　14．山ノ鼻古墳１号墳　15．山ノ鼻古墳２号墳　16．若八幡宮古墳　17．下谷古墳　18．丸隈山古墳
19．蓮町遺跡　20．飯氏引地遺跡　21．飯氏Ｃ14号墳

Fig. 1．周辺遺跡分布図（1/25,000）

3．立地と歴史的環境

福岡市の西郊には「伊都国」として栄えた糸島平野が玄界灘にむかって拡がり、その東縁には、小山塊によって画された今宿平野と通称される東西長３km、南北幅１kmほどの狭長な小平野がある。この今宿平野は、南を高祖山、東を叶岳～長垂山の小山塊によって早良平野と画され、北は今津湾に面した海岸砂丘が弧状に延びている。平野の東部には、高祖山から流れ出た小河川が小さな扇状地を造り出し、西部には砂丘後背地のラグーンが拡がっている。

青木遺跡は、この今宿平野のほぼ中央部に位置し、高祖山から派生した標高10m程の舌状丘陵上にある。本遺跡周辺の平野部や周縁の丘陵地帯から海岸砂丘上には弥生時代から中世の遺跡が数多く立地している。

旧石器時代から縄文時代の遺跡はほとんど知られていないが、今宿五郎江遺跡では旧石器時代の彫器や縄文時代に比定される打製石鏃が遺物包含層中から検出されており、その可能性が示唆されている。

弥生時代になると遺跡は平野各域に亘って増加する。今津湾に望む砂丘上の今宿遺跡群には弥生時代前～後期の甕棺墓や箱式石棺墓からなる一大墳墓群があり、13・14地点からは細形銅剣と勾玉を副葬した一群が検出されている。この砂丘西端の独立丘陵上には玄武岩製石斧の製作址として著名な今山遺跡があり、その石斧は北部九州一円に供給されている。今宿五郎江遺跡には低台地上に後期の環濠集落があり、中～後期の溝中からは小銅鐸のほか鍬、鋤の農耕具や槌、斧柄、手網柄等の木器類や漁労具が多数検出され、海浜性集落の生成基盤を窺わせている。青木遺跡でも第１次調査区で後期の甕棺墓が検出されているほか、大塚遺跡では後期後半の竪穴住居址が検出されている。

古墳時代になると遺跡は平野一円に拡がり、大塚遺跡や女原遺跡等では竪穴住居跡や掘立柱建物址等が調査されている。同時に海岸部では製塩、山麓部では須恵器と鉄の生産が行なわれている。今山遺跡下の砂丘上では布留併行期の製塩土器が多数出土している。製塩炉址は未検出ながらも塩生産の証左となろう。一方、高祖山北麓には第Ⅰ型式期に遡る須恵器窯跡の新開窯址があるほか、20ケ所にのぼる鉄滓の散布地が確認されている。玄界灘一帯は、良質な砂鉄を産する花崗岩地帯であり、その砂鉄を素とした鉄生産が行なわれたものであろう。その開始は６世紀後半代と推定される。これらの生産基盤に支えられて平野縁辺の丘陵や段丘上に若八幡宮古墳、鋤崎古墳、丸隅山古墳、今宿大塚古墳を初めとする前～中期の前方後円墳が造営され、後期になると鋤崎古墳群、相原古墳群、女原古墳群等の群集墳が築造されている。

古代～中世の遺跡も近年相次いで調査されている。徳永遺跡では奈良～平安時代の青磁が多量に出土している。青木遺跡や今宿五郎江遺跡では平安～鎌倉時代の掘立柱建物址群が、女原遺跡では水田跡も検出され集落や生産活動の様子が次第に明らかになりつつある。

Fig. 2. 青木遺跡第2次調査区位置図（1/10,000）

II. 調査の記録

1. 調査の概要

青木遺跡は、今宿平野東部を北流する七寺川左岸の低丘陵上に拡がり、その分布域は東西40m、南北100mの広範囲にわたる。分布調査時には弥生時代～中世までの遺物が採集されているが詳細は不祥であった。1985(昭和60)年には福岡市西消防署の建設に伴って第1次調査が実施され、弥生時代の竪穴住居址や甕棺墓と中世の掘立柱建物址等が検出されている。今回調査した第2次調査区は、この第1次調査区とはバイパスを隔てた南に隣接して位置している。

第2次調査地点は、南北に長い青木遺跡群の東緩斜面上に占地し、調査区の東側には谷が貫入している。この谷は、深さが2m程で最下層には弥生時代～古墳時代の遺物を含んだ堆積層がある。調査地の基本層序は、上層より水田耕土、床土、褐色土、暗茶褐色土と続き、20～40cmで遺構面である黄褐色ローム層に達する。このうち暗茶褐色土層には弥生時代～中世の遺物が含まれているが、立地上尾根筋は薄く緩斜面上はやや厚く堆積する。調査では、弥生時代の井戸址、竪穴住居址と中世の井戸址、掘立柱建物址、土壙、溝等を検出した。このうち弥生時代の遺構は散逸的で希薄な分布状況を示す。一方、中世の遺構は掘立柱建物址を主体とし、これらを取り込む様にして矩形の溝が配されている。該期の一様相を示すものとして興味深い。尚、調査範囲は構造物部分のみ留め、駐車場用地等は盛土によって保存した。

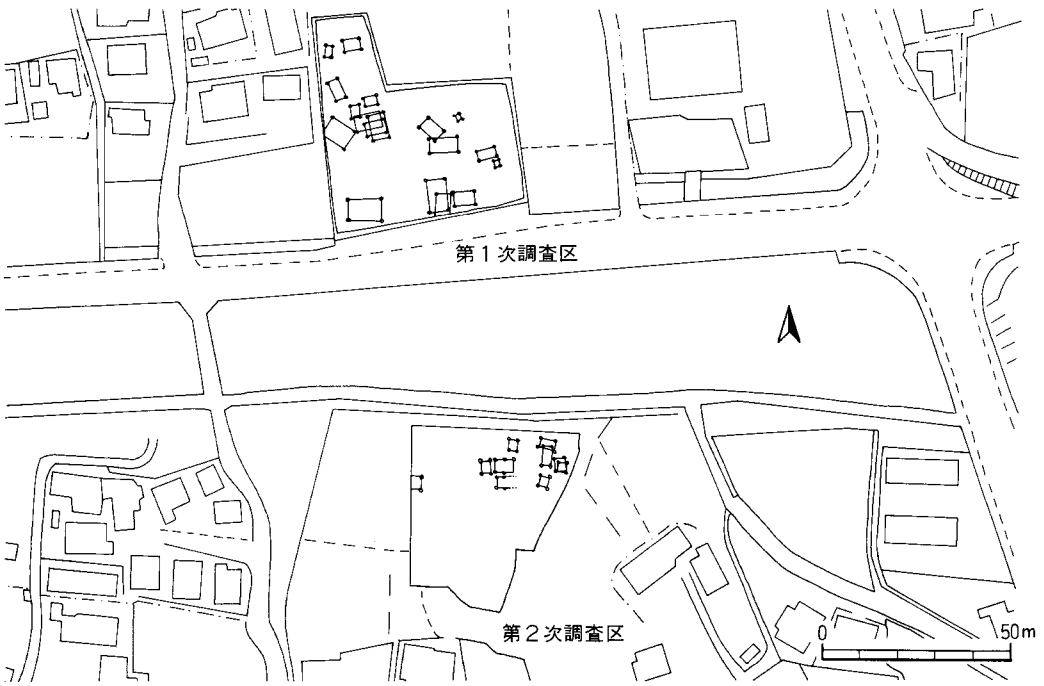


Fig. 3. 調査区周辺現況図 (1/2,000)

Fig. 4. 遺構配置図 (1/300)

2．弥生時代の調査

青木遺跡の第2次調査において検出した弥生時代の遺構としては、井戸址2基と竪穴住居址1棟とがあるが、その分布状況及び密度は極めて希薄である。このうち井戸址は低丘陵の尾根筋上に近接して並置しているが、竪穴住居址は東側の浅い谷に緩斜面上に立地している。このためか竪穴住居址は削平が著しく、周溝と主柱穴の一部が遺存するのみである。また、ピットのうちにも明らかに該期と特定できるものは少なく、耕地化による削平で消失したものがあったとしても概ね遺構は希薄なものであったろうと考えられる。このことは1985(昭和60)年に発掘調査された今宿バイパス北側の第1次調査区においても同様の傾向が窺える。しかしながら遺物包含層中には、玄武岩製の太型蛤刃石斧の未製品が比較的多く含まれていることから調査区の周辺域には該期の遺構が拡がっている可能性も十分に考えられるが、想定しうる構成としては比較的小規模なものであったろうと思われる。

1)．井戸址

弥生時代の井戸址は、調査区の中央部西寄りの尾根筋上で2基検出した。この2基の井戸址は、約6mの間隔を置いて東西に並んでいる。井戸は2基ともに楕円形をした素掘りのものである。遺構検出面よりの深さは2.3～2.4mで、底面は八女粘土層まで達している。湧水点は鳥栖ローム と八女粘土とが境をなす標高8～8.3m付近と壙底で観察されたが、時期的なものか湧水量は少なかった。遺物は少なく、該期の井戸によく観られる一括投棄された祭祀土器はまったくなかった。

SE－02（Fig. 6，PL. 2）

本井戸は、調査区のほぼ中央部にある素掘りの井戸で、東南6mの距離にはSE－03がある。平面形は長径193cm、短径125cmの楕円形プランを呈し、壙底までの深さは2.3mを測る。壁面は上半が緩く傾斜して屈曲した後に壙底へむかって直線的に窄まるが、北壁側には壙底より50cmのところで半月形のテラス面をつくる。また、このテラス面上70cmのところには人頭大の花崗岩が並んでいた。不整円形を呈する壙底は標高

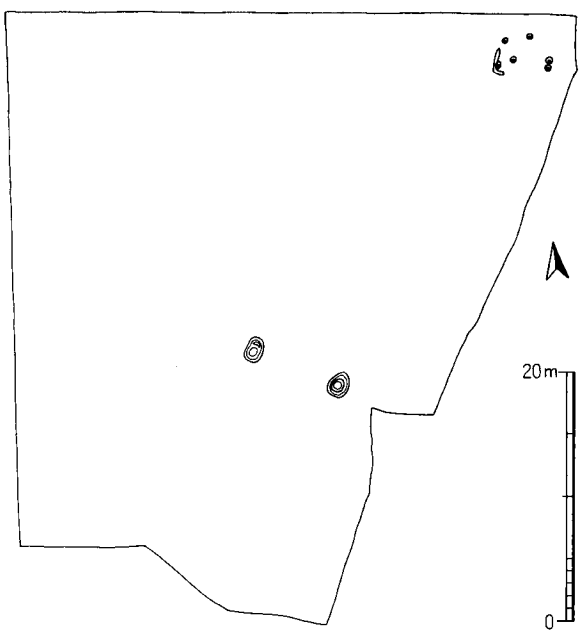


Fig. 5．弥生時代の遺構配置図（1/600）

7.7mで、八女粘土層下の砂礫質層まで達している。遺物は弥生土器が少量出土している。

出土遺物（Fig.7．PL.10）

1は、上半部を欠く器台で、底径10cm、現高8.9cmを測る。脚裾は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。内面は指頭押圧後ナデて仕上げている。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色を呈する。

SE－03（Fig.6．PL.2）

本井戸は、調査区の中央部西寄りで検出した素掘りの井戸である。SK－05のすぐ北に位置し、SE－02からは東南へ6mの距離にある。平面形は長径200cm、短径163cmの楕円形プランを呈し、壙底までの深さは2.4mを測る。壁面は、ほぼ垂直に掘り込んだのち一旦緩傾斜して壙底へ窄まる。径70cmの円形の壙底は八女粘土層まで達し、標高は7.8mを測る。壙底より30cm上に鳥栖ローム層との境があり、ここより湧水が観られた。遺物は少なく、弥生土器片がわずかに出土した。

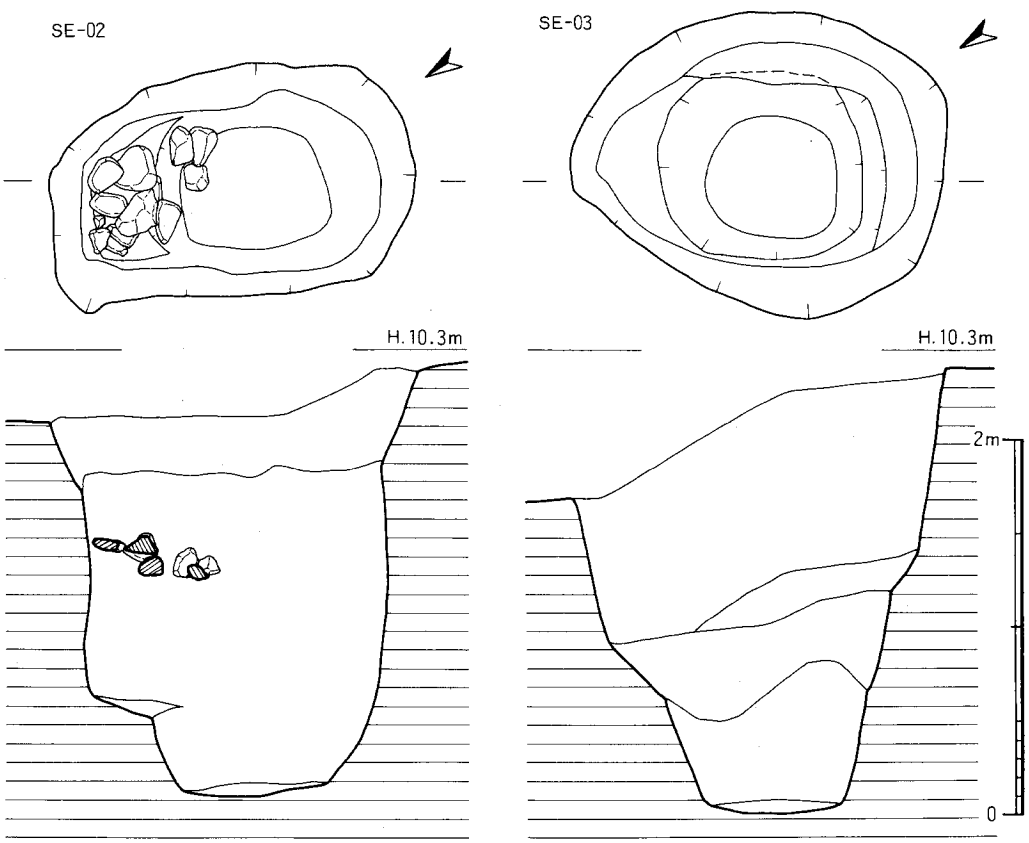


Fig. 6．SE-02・03実測図（1/40）

2)．竪穴住居址

弥生時代の竪穴住居址としては、調査区の北東端で１軒を検出した。しかし、それは周辺の耕地化に伴う削平を受けて遺存状況はきわめて悪く、既に数軒かの竪穴住居址が消失してしまっている可能性もなくはない。また、出土遺物が微量なため明確な時期決定はなしがたい。なお、この期の竪穴住居址はバイパスを隔てた第１次調査で、中期と思われる円形の竪穴住居址が２軒検出されているがいずれも遺存状況はよくない。

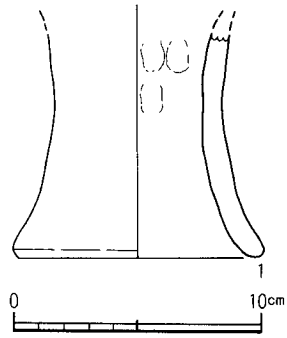


Fig. 7．SE-02出土土器実測図（1/3）

SC－01（Fig. 8．PL. 4）

本址は、調査区北東隅の緩斜面上で検出した住居址である。すぐ東にはSB－06が位置し、北側はSD－03によって切られている。全体に削平が著しく、現況は南西コーナーの周溝と南壁際の柱穴２本を残しているのみであるが、平面形は遺存する南側柱穴と周溝からすると一辺が5.4mの方形プランに復原できよう。遺存する周溝は幅15cm、深さ５cmを測り、断面形は浅いU字状をなす。床面は消失しているが、主柱穴は柱間が約2.8mの４本柱となろう。柱穴の平面形は径25～35cmの円形を呈し、深さは40～50cmを測る。遺物は柱穴内より土器小片がわずかに出土したのみである。

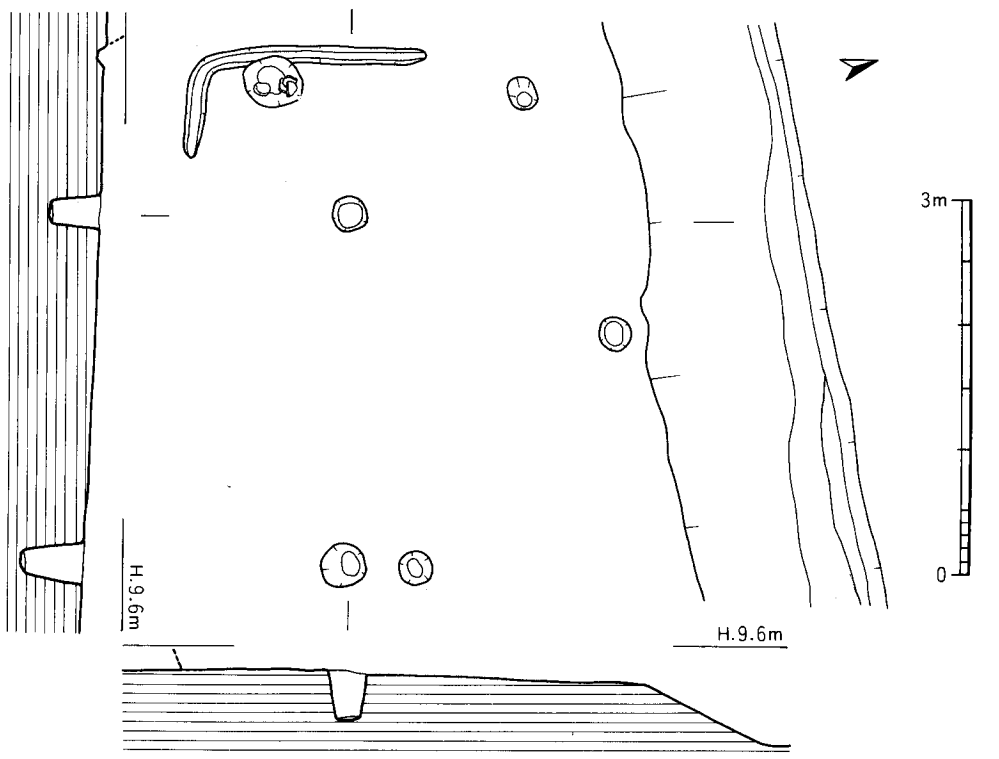


Fig. 8．SC-01実測図（1/60）

3．中世の調査

青木遺跡の第2次調査で検出した遺構は、竪穴住居址、井戸址、掘立柱建物址、土壙、溝遺構等と多数あるが、その時期は概して弥生時代と中世に大別できる。このうち弥生時代の遺構は竪穴住居址と井戸址のみで極めて少なく、掘立柱建物址等ほとんどの遺構は中世に比定できるものである。

調査で検出した中世の遺構としては、井戸址2基、掘立柱建物址10棟、土壙7基、溝遺構5条と多数のピットがあり、それらは調査区の全域にわたって広く分布している。この中でも集落を主体的に構成するものは掘立柱建物址と溝遺構である。10棟の掘立柱建物址はいずれも1×1間～1×3間規模の小さいものであるが、その棟方向等からしてIIないしIII期に時期区分されるうるものであろう。また、その分布はSD－02東側の一群（SB－01～09）とSD－01西側の一群（SB－10＋α）とにまとまっている。そしてこれらの掘立柱建物址群を取り囲む様にして濠様の幅広い溝SD－02と03がある。この2条の溝は東側が谷に注ぎ、三方は建物群を囲む様にして「コ」字状に巡る。この溝の北西隅部は幅約8mに亘って途切れ陸橋状をなしている。この掘立柱建物址群と溝を一体としてみると、溝に囲まれた建物群は溝の北半部に比較的まとまってあり、南半部は広場的な空間域をなして見える。一方、1985（昭和60）年に発掘調査された今宿バイパス北側の第1次調査区でも同時期と考えられる掘立柱建物址群が検出されている。しかしながら、これらの建物群は溝等によって明らかに区画されたものはなく、同期に近接してありながら本調査区の建物群とはやや様相を異にしているが、該期の集落域は周辺の広範囲にわたって展開していたものと思われる。

土壙は7基あるが、これらは散漫的な分布状況を示す。また、SK－03を除いて出土遺物がないことからその時期も明らかでなく、掘立柱建物址群等との有機的な関わりも判然としがたい。しかしながら、「コ」字状の溝内にある一群（SK－04～06）は溝内の南半部にまとまり、北半部にまとまって分布する建物址群との対比においては集落構成のあり方を考える好資料となるものであろう。

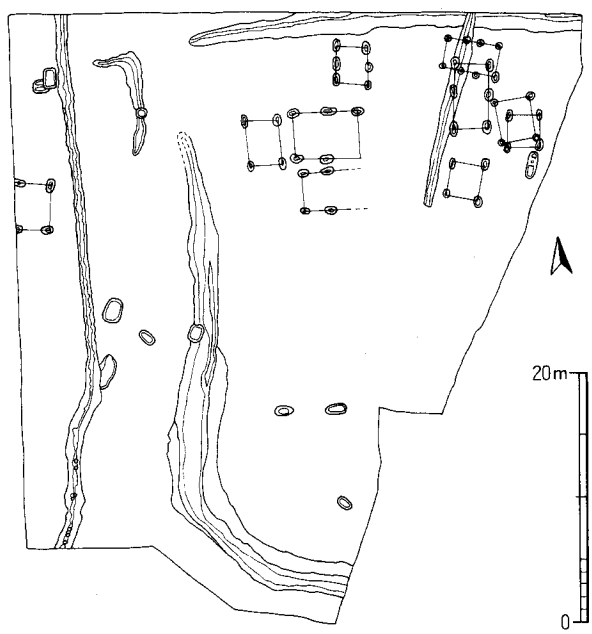


Fig. 9．中世の遺構配置図（1/600）

1). 井戸址

中世の井戸址は、調査区の中央部西寄りに位置して2基検出した。この2基の井戸址は、約6mの間隔を置いて東西に並んでいる。遺構検出面よりの深さは90～110cmで、弥生時代の井戸址と比べて非常に浅いが、土壙等に比べてその形状や深度が大きく異なることから井戸として考えた。井戸は2基ともに隅丸長方形をし、各コーナーの壁面には板材を挟入した痕跡が認められることから井筒として木枠を用いたものと推定される。

SE－01（Fig.10. PL.3）

本井戸は、調査区の中央部西寄りで検出した井戸である。東6mの距離にはSE－04があり、またすぐ西にはSD－01が北流している。平面形は長軸187cm、短軸140cmの隅丸長方形プランを呈し、壙底までの深さは90cmと浅い。壙底の断面形は舟底状をなし、標高は9.2mを測る。壁面はやや緩傾斜して窄まる。この壁面の各コーナー部には奥幅で5cm、奥行で5～8cm程の挟入が観られた。この壁際には灰黒色の粘質土が薄く貼りついており、板材をして井戸枠とした可能性が考えられる。また、検出面に近い所には人頭大の花崗岩が並んでいたが、これは埋没後の所産と考えられる。

SE－04（Fig.10. PL.3）

本井戸は、調査区のほぼ中央部で検出した井戸で、上面はSD－02によって切られている。同期の井戸SE－01は西へ6mの距離にある。平面形は長軸135cm、短軸112cmの隅丸長方形プランを呈し、壙底までの深さは1mを測る。壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれているが、壙底は小さく袋状に抉り込んでいる。壁面の各コーナー部にはSE－01同様の挟入があり、板材をして井戸枠とした可能性が考えられる。壙底は中央部がやや窪み、標高は8.9mである。

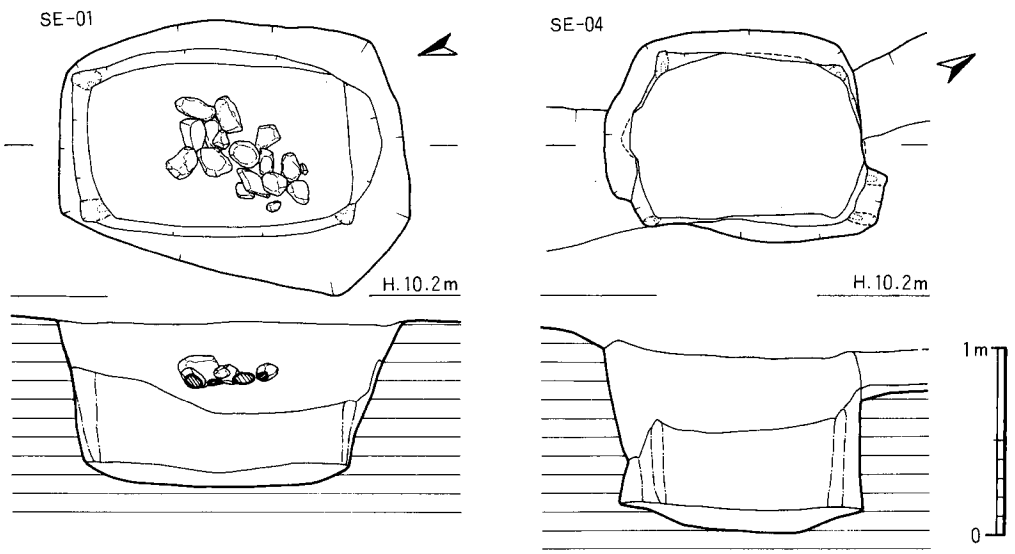


Fig. 10. SE-01・04実測図（1/40）

2). 掘立柱建物址

中世に比定しうる掘立柱建物址は、調査区の北側に偏して10棟を検出した。このうち9棟は「コ」字状に巡る溝によって区画された空間域の北側にまとまって分布している。また、西側の1棟もその東側にやや深い溝が建物址に沿って北流しており、東側の一群と同様のあり方を示す可能性も考えられる。これら建物址の柱穴は長楕円形のものと円形のものがあるが、前者例がその大勢を占める。この柱穴プランの相違が、そのまま時期的な相違を示すものか否かは出土遺物が希少なために即断できない。

SB－01（Fig.12. PL.4・5）

本址は、調査区の北側で検出した1×2間の南北棟の建物址で、SD－03のすぐ南に位置する。梁行全長は2.4m、桁行全長は3.0mを測り、桁行柱間は1.5mの等間である。柱穴の平面プランは長軸110cm、短軸50cmの長方形～長楕円形をなし、深さは40～60cmを測る。

SB－02（Fig.12. PL.4・5）

本址は、調査区北側にあるSB－01のすぐ南で検出した1×2間の東西棟の建物址である。梁行全長は3.6m、桁行全長は5.2m。桁行柱間は2.6mの等間で、柱間はいずれもやや長い。柱穴は長軸100～120cm、短軸60cmの長方形プランを呈し、深さは40～60cmを測る。

SB－03（Fig.13. PL.4・5）

本址は、SB－02のすぐ西で検出した1×1間の南北棟の建物址である。梁行全長は2.6m、桁行全長は3.4mを測り、柱間はやや長めである。柱穴の平面形は、長軸80～90cm、短軸40～60cmの長楕円形をなし、深さは40～50cmを測る。

SB－04（Fig.13・14. PL.4・5・10）

本址は、SB－02のすぐ南にある建物址で、1×2間の東西棟になろう。梁行全長は3.2m。桁行の柱間は2.2mで、桁行全長は4.4mに復原できよう。柱穴は長軸80～110cm、短軸40～50cmの長楕円形をなし、深さは40cm。P－2を除いて径10～15cmの柱痕跡が確認された。

2は、P－1より出土した土錘で、長さは2.9cm、幅は1.1cm、孔径は2.5mm、重さ3.7g測る。

SB－05（Fig.13. PL.4・5）

本址は、調査区北東部にある1×2間の南北棟の建物址で、北妻側はSB－06と重複し、西平

	規模	方向	方位	梁行		桁行		面積 (m²)	備考
				全長	柱間	全長	柱間		
SB01	1×2	南北	N-5°-E	2.4	2.4	3	1.5・1.5	7.2	
SB02	1×2	東西	N-88°-W	3.6	3.6	5.2	2.6・2.6	18.8	
SB03	1×1	南北	N-2°-W	2.6	2.6	3.4	3.4	8.9	
SB04	1×2	東西	N-3°-E	3.2	3.2	4.4	2.2・2.2	7.1	
SB05	1×2	南北	N-5°-E	2.6	2.6	5.2	2.6・2.6	13.6	
SB06	1×3	東西	N-88°-W	2.5	2.5	4.2	1.5・1.2・1.5	10.5	柱穴内に礎石あり
SB07	1×1	南北	N-15°-E	2.6	2.6	2.8	2.8	7.3	
SB08	1×1	南北	N-7°-W	2.8	2.8	3.2	3.2	9	柱穴内に礎石あり
SB09	1×1	南北	N-7°-E	2.4	2.4	2.6	2.6	6.3	
SB10	1×2	東西	N-83°-W	3.8	3.8	5.2	2.6・2.6	19.8	

Fig. 11. 掘立柱建物址一覧表

側はSD－04に切られている。梁行全長は2.6m。桁行は全長が5.2mで、柱間は2.6mを測る。柱穴は長軸80～110cm、短軸50～70cmの長楕円形をなし、深さは40～60cmを測る。

SB－06（Fig.13. PL.4・5）

本址は、調査区の北東端にある1×3間の東西棟の建物址である。SD－04より古く、南平側はSB－05と重複している。梁行全長は2.5mを測る。桁行は全長が4.2mで、柱間は1.5m・1.2m・1.5mを測る。柱穴の平面形はP－2が楕円形をなす外は径30～40cmの円形を呈する。P－4は径約10cmの柱痕跡下に拳大の礫石を2個敷いて礎石としていた。

SB－07（Fig.15. PL.4）

本址は、建物址群の東南端にある1×1間の南北棟の建物址で、SB－05のすぐ南にある。梁行全長は2.6m、桁行全長は2.8mである。柱穴は、長軸60～90cm、短軸30～50cmの長方形をなし、深さは30～50cmを測る。柱穴内からは径約15cmの柱痕跡が確認された。

SB－08（Fig.15. PL.4・5・6）

本址は、建物址群の東端にある1×1間の南北棟の建物址で、SB－09と重複している。梁行全長は2.8m。桁行全長は3.2mを測る。柱穴の平面形は径40～50cmの円形～方形をなし、深さは20～40cmを測る。柱穴のうちP－1と2では底面に拳大の礫石を数個敷いて礎石としている。

SB－09（Fig.15. PL.4・5・6）

本址は、調査区の北側に分布する建物址群中で最も東端にある1×1間の南北棟の建物址で、SB－08と重複している。梁行全長は2.4m、桁行全長は2.6mである。柱穴は長軸70～90cm、短軸

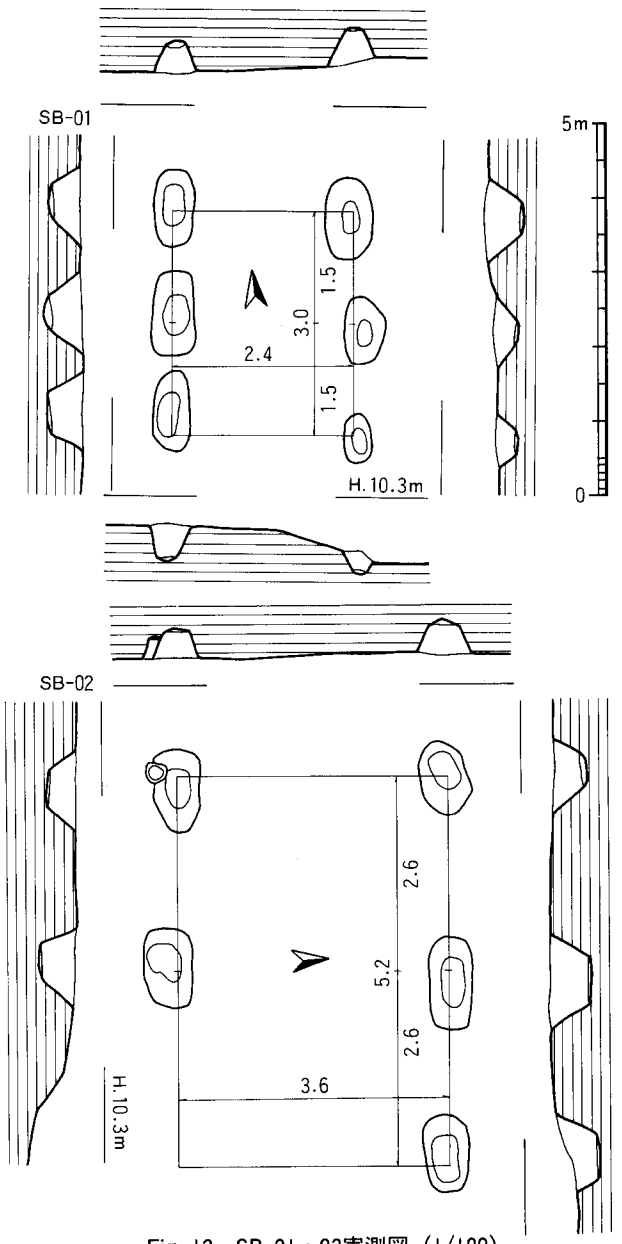


Fig. 12. SB-01・02実測図（1/100）

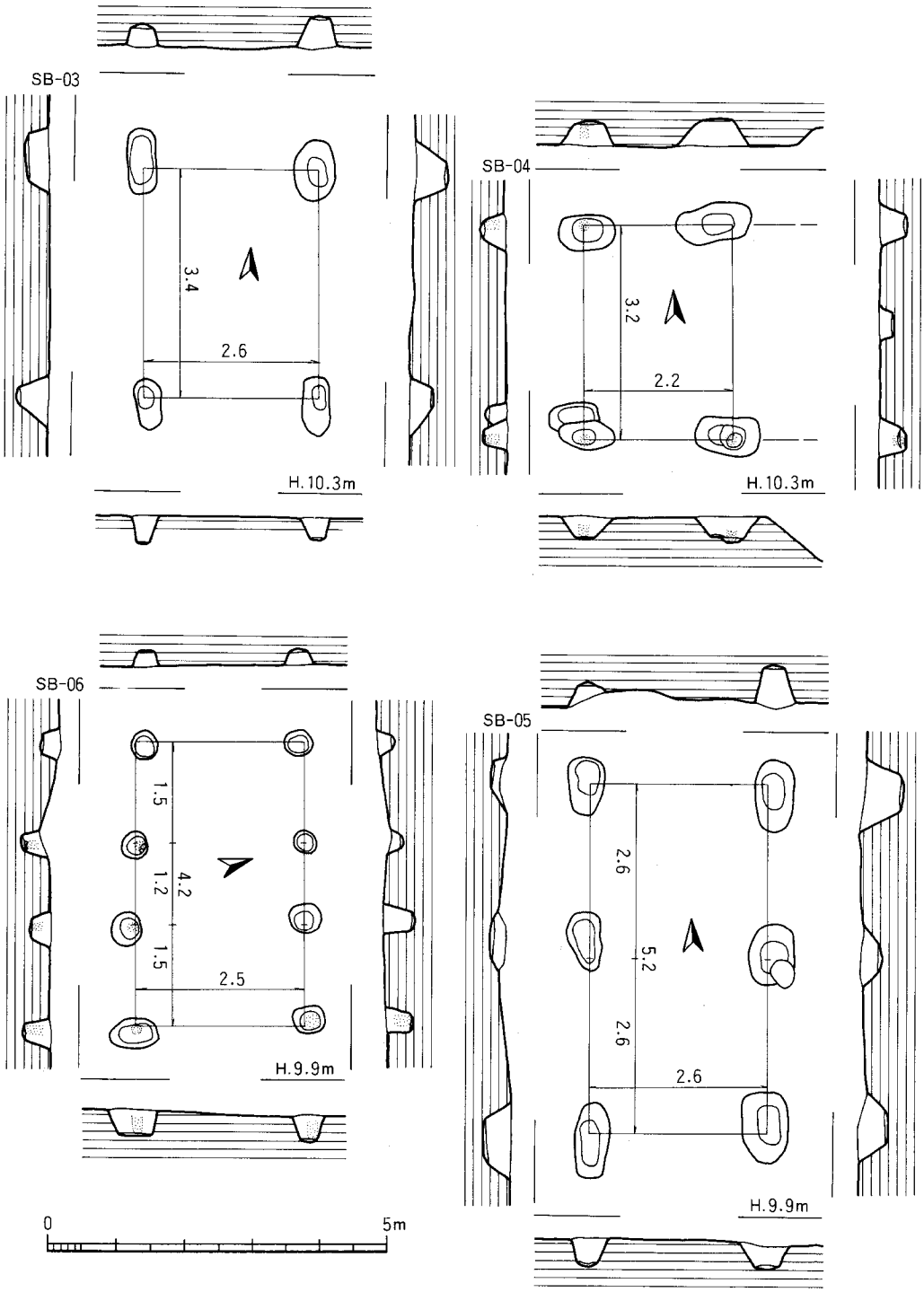


Fig. 13. SB-03～06実測図 (1/100)

40cmの長方形プランをなし、深さは30～40cmを測る。柱穴の内には径約15cmの柱痕跡を残すものもある。

SB－10（Fig.15. PL.5・6）

本址は、調査区の西端にあり、北東部に群集するSB－01～09の一群と隔絶している。柱穴が調査区外に拡がり不確実であるが、1×2間の東西棟の建物址に復原できよう。柱間は梁行が3.2m、桁行が2.6mである。柱穴は長軸90～110cm、短軸60cmの長方形をなし、深さは40～60cmを測る。

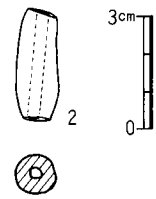


Fig. 14. SB-04
出土土製品実測図（1/2）

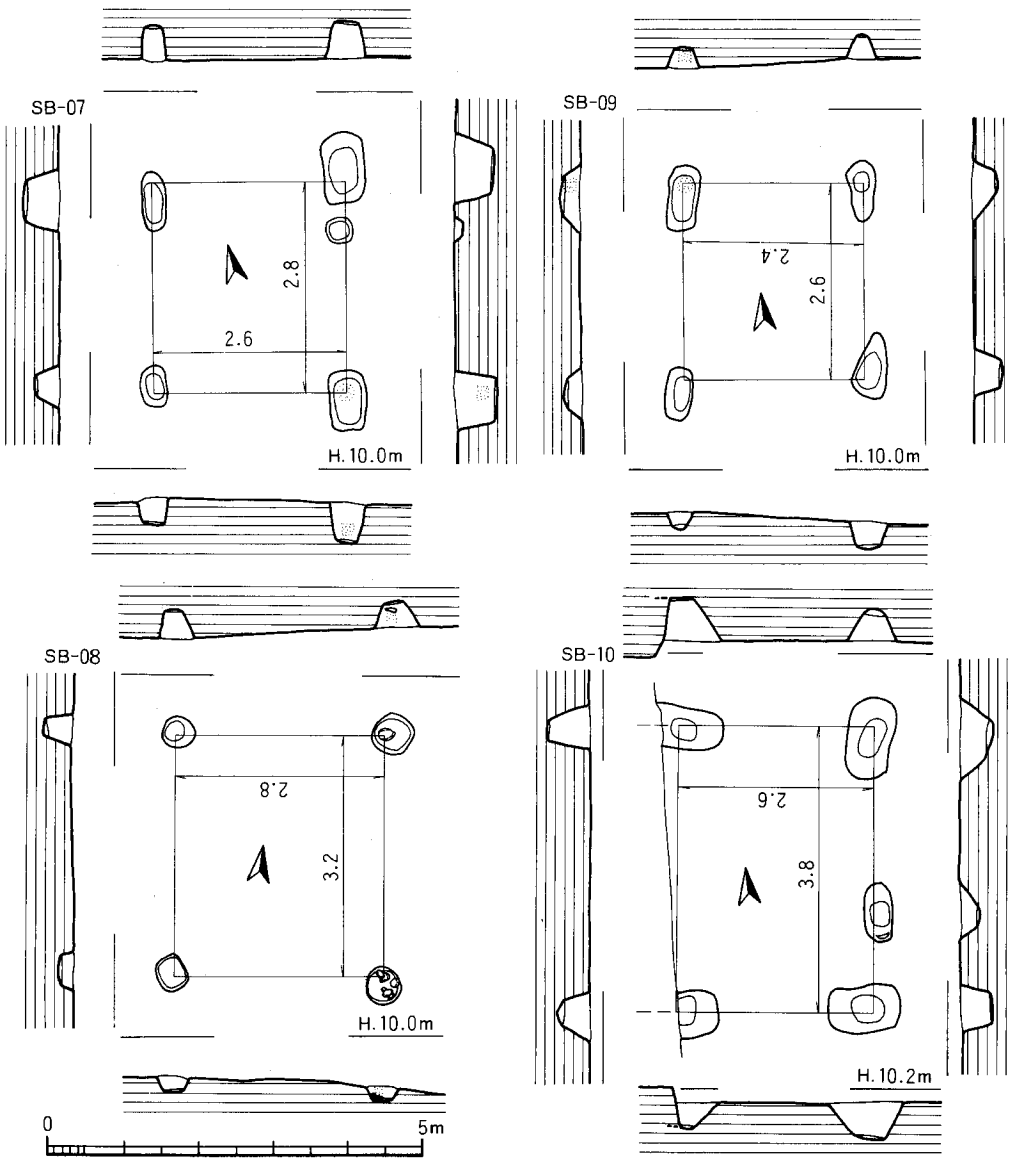


Fig. 15. SB-07～10実測図（1/100）

3). 土　壙

土壙は、すべてで7基を検出した。これらの土壙は調査区の全域に拡がるが、南側の台地上にまとまるSK－04～06の3基を除いて散漫に分布する。平面的には楕円形～長方形プランを呈し、形状的には類似する。しかし、その機能はSK－03が墓壙の可能性を示す以外はいずれも判然としない。また、遺物はSK－02と03を除いては何ら出土しておらず、その時期も明確にはしがたい。

SK－01（Fig.16. PL.7）

調査区の北西端で検出した土壙で、西南部はSK－02と重複し、すぐ東にはSD－01が北流する。平面形は、長軸155cm、短軸100cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－4.5°－Eにとる。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がり、壁高は20cmを測る。底面は、浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

SK－02（Fig.16. PL.7）

調査区の北西端に位置し、東小口側はSK－01に切られている。平面形は、長軸125cm、短軸95cmの隅丸長方形プランを呈し、N－87°－Eに主軸方位をとる。深さ約20cmの壁面は緩傾斜して立ち上がり、底面は浅い凹レンズ状をなす。北側には浅いフラット面をつくり、断面形は2段掘りの構造をなす。遺物は、土師器細片が出土したのみで明確な時期は決しがたい。

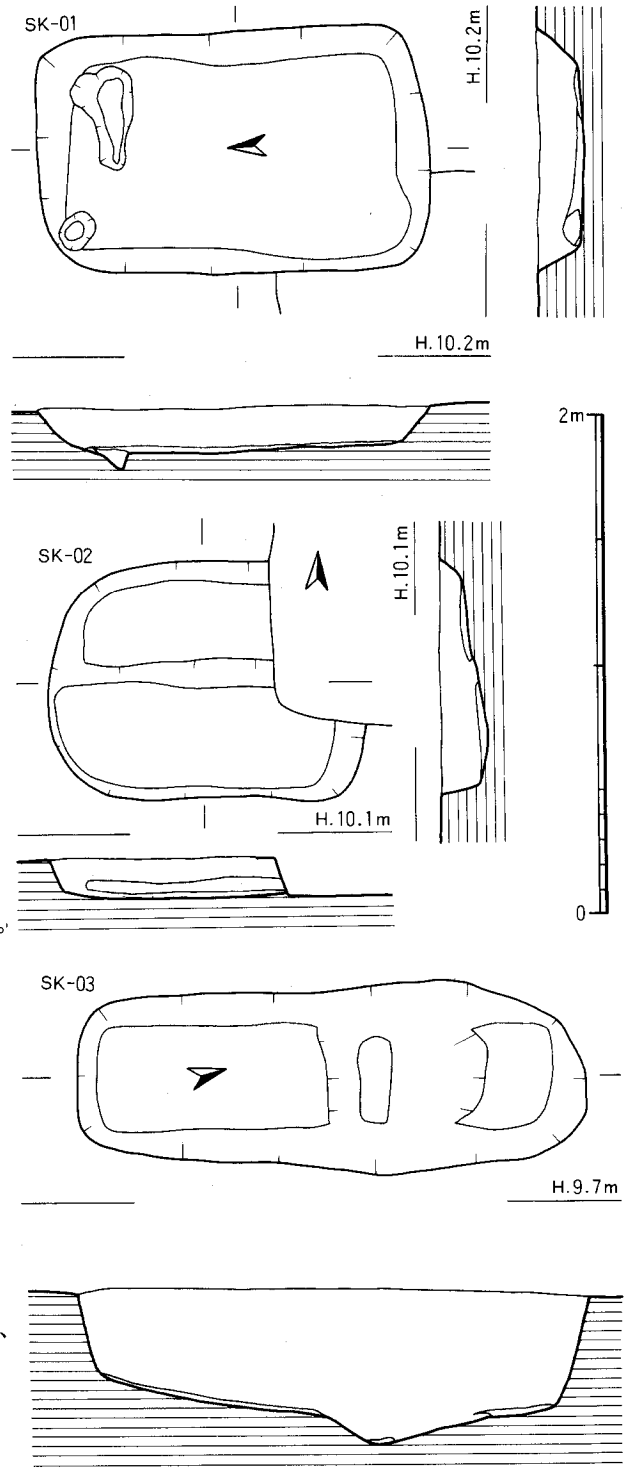


Fig. 16. SK-01～03実測図（1/30）

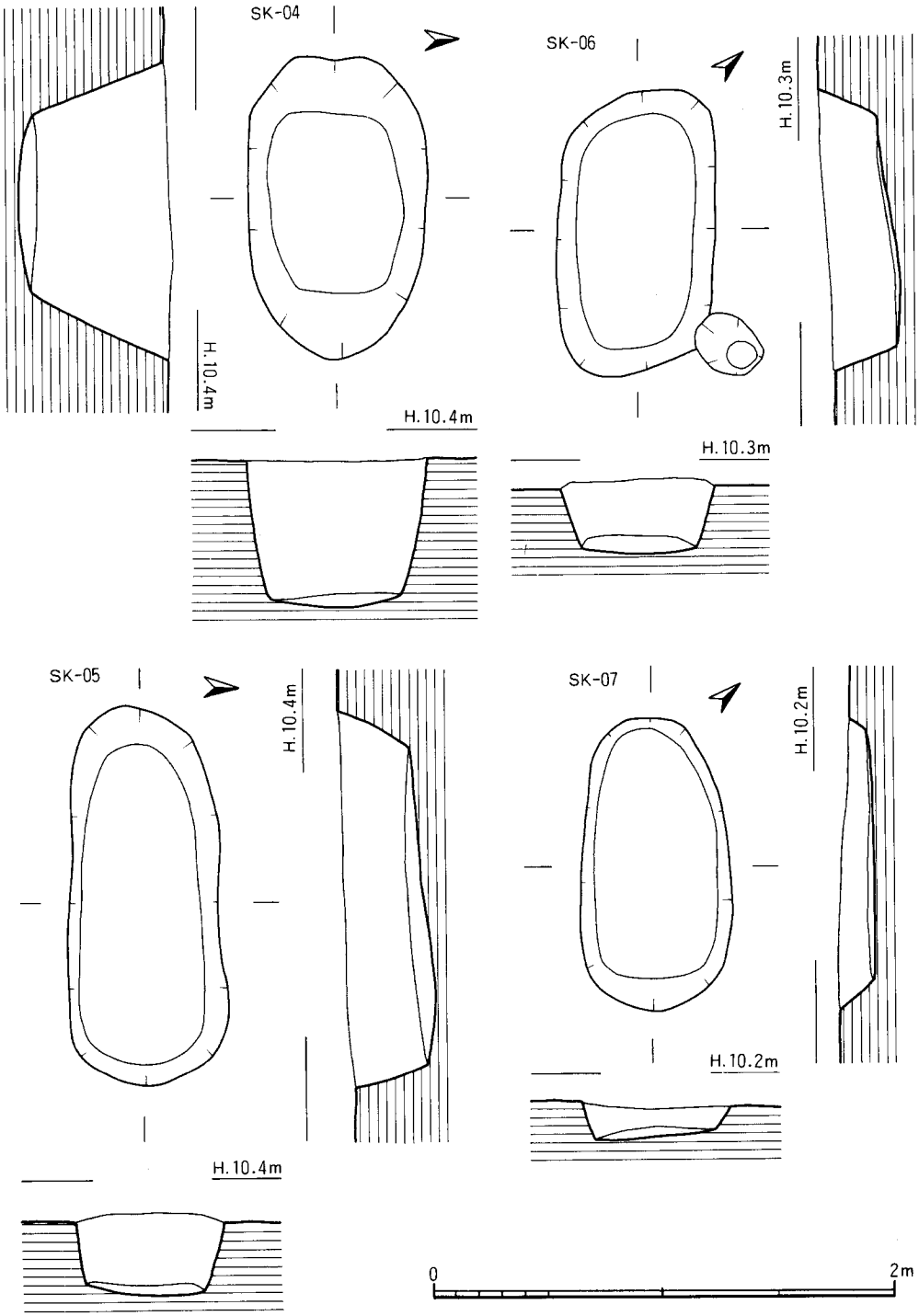


Fig. 17. SK-04～07実測図 (1/30)

SK－03（Fig.16. PL. 7）

調査区の東端で検出した土壙で、SB－09のすぐ南に位置している。平面プランは、長軸200cm、短軸75cmの長方形を呈し、主軸方位をN－18°－Eにとる。壁面は直線的に立ち上がり、壁高は最深部で60cmを測る。底面は、浅い凹レンズ状を呈し、断面形は逆台形をなすが、中央部は浅い摺鉢状に窪む。その形状からして土壙墓の可能性も考えられなくはない。覆土は褐灰色土～暗褐色土が凹レンズ状に堆積し、遺物は弥生土器、土師器、須恵器片が出土した。

SK－04（Fig.17. PL. 8）

調査区の南側の台地上で検出した土壙で、SK－05の西3mの距離にある。平面形は、長軸132cm、短軸77cmの楕円形プランを呈し、N－87.5°－Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は65cmを測る。底面は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。覆土は褐灰色土・褐色土・暗黄褐色土・乳灰色粘土がレンズ状に堆積していた。遺物の出土はない。

SK－05（Fig.17. PL. 8）

調査区南側の台地上で検出した土壙で、SE－03のすぐ南に位置する。平面プランは、長軸165cm、短軸70cmの長楕円形を呈し、主軸方位をN－4°－Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は35cmを測る。逆台形の底面は、東側が浅く窪む。覆土は上層が褐灰色土、下層が明褐色土である。遺物は1点も出土していない。

SK－06（Fig.17. PL. 9）

調査区南側の台地上にあり、土壙群中で最南端に位置する。SK－05の南約7mの距離にある。平面形は、長軸123cm、短軸68cmの隅丸長方形プランを呈し、N－50°－Eに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは33cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は東側へ緩やかに傾斜している。覆土は灰褐色～明褐色土が凹レンズ状に堆積し、最下層には明赤褐色粘土

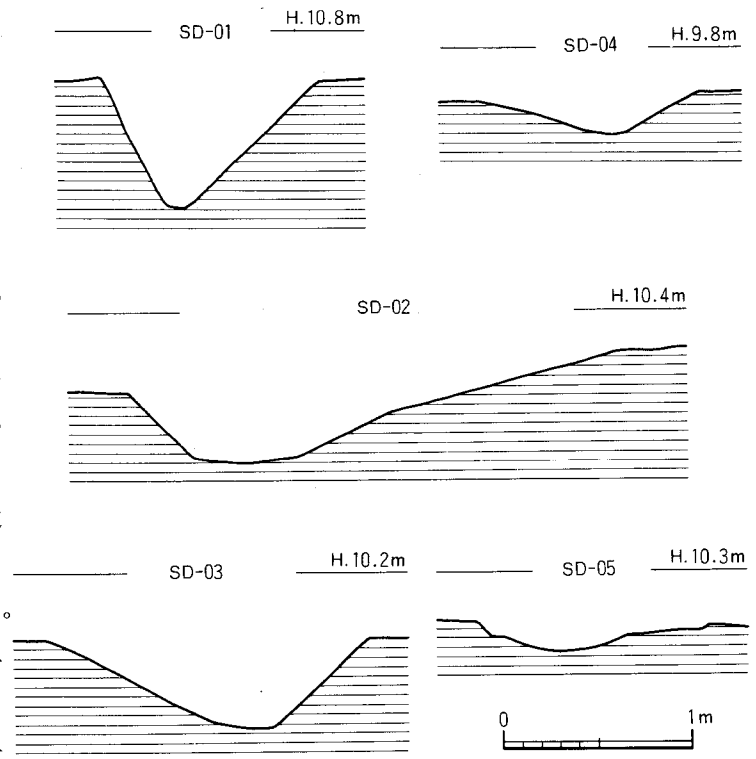


Fig. 18. SD-01～05断面図（1/40）

ブロックがある。遺物は１点も出土していない。

SK－07（Fig.17．PL.９）

調査区の東南部に位置する土壙で、SE－01の東南２mの距離にある。平面プランは、長軸125cm、短軸65cmの楕円形を呈し、N－46°－Wに主軸方位をとる。緩やかに立ち上がる壁面は、深さ15cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺物は出土していない。

4)．溝遺構

溝は、大小合わせて５条を検出した。この中で集落を構成する掘立柱建物址群と大きく関わりをもつものはSD－01～03の３条の溝である。いずれも建物群を隔絶する位置にある。殊に「コ」字状をなすSD－02と03は一端が途切れているものの同構造をなし、一連のものと考えられる。集落の主体となる掘立柱建物址は、この溝の北半にまとまり南半は広場的空間を作り出している。これは同期の建物址群を検出している第１次調査区では観られない現象であり、該期の集落構造を解する一資料となり得よう。

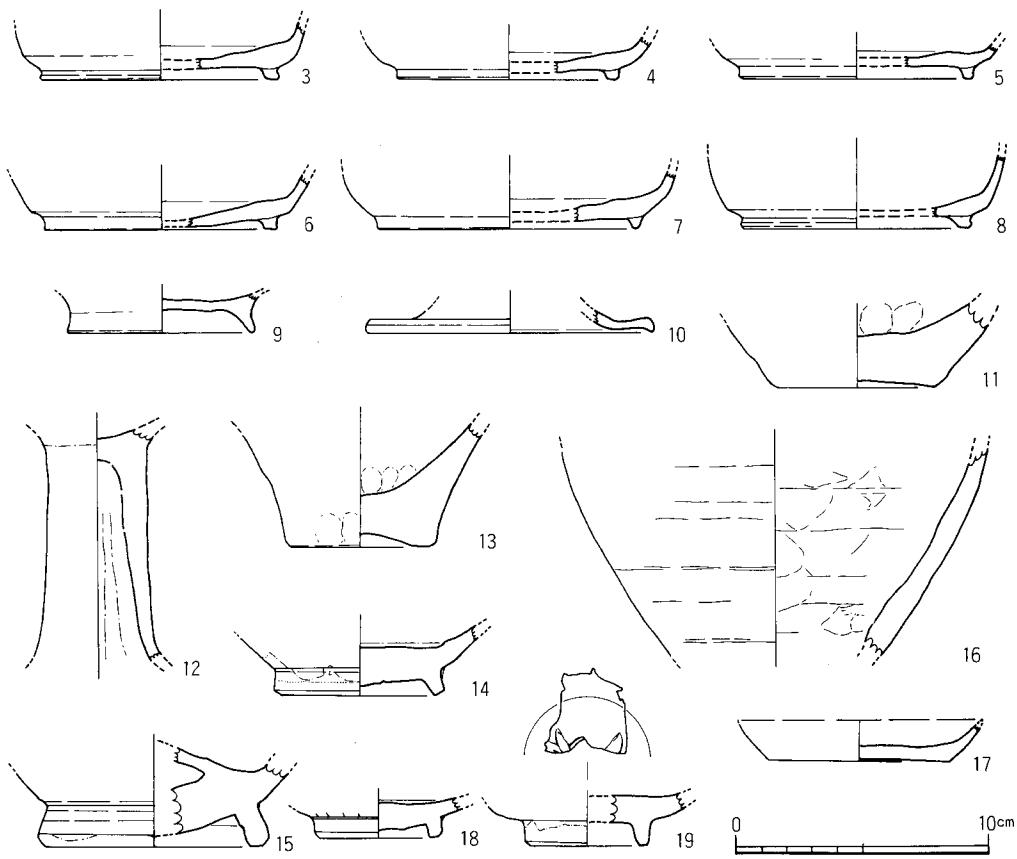


Fig. 19．溝遺構出土土器実測図（1/3）

SD－01（Fig.18. PL.1）

本溝は、調査区の西端を直線的に北流する。SB－10に沿うように直流しており、SD－02のようにその北側で矩形に屈曲することも考えられる。溝幅は120cm、深さは約70cmを測り、断面形はV字状をなす。覆土は砂質土層で、弥生～鎌倉時代までの遺物が多く出土した。

出土遺物（Fig.19・20. PL.10）

3～8は高台付の須恵器坏身で、体部が内弯気味に直口するもの（3・4・7・8）と外反気味に立ち上がるもの（5・6）とがある。高台は平坦であるが、8は端部を外方に小さく摘み出す。高台径は8.8～10.4cm。9は高台径が7.4cmの土師器坏身で、高台はやや高い。10は須恵器高坏の脚で、底径は11.4cm。短い脚は裾を大きく開き、端部は下方に摘み出す。11・12は弥生土器である。11は底径6.4cmの壺で、体部は内弯気味に開く。12は高坏脚で、裾部はラッパ状に開く。

20は太型蛤刃石斧の刃部である。刃部及び側辺は丁寧に研磨を施している。現長6.7cm、幅7.3cm、厚さ3cm＋αを測る。21は扁平片刃石斧の刃部である。刃部や側辺は丁寧に磨ぎ上げている。現長3.7cm、幅4.9cm、厚さは1.4cmを測る。22は敲打石片である。

SD－02（Fig.18. PL.1）

本溝は、溝幅3～4mの大型の溝で深さは現状で50cmを測る。溝は調査区中央部を南流した後

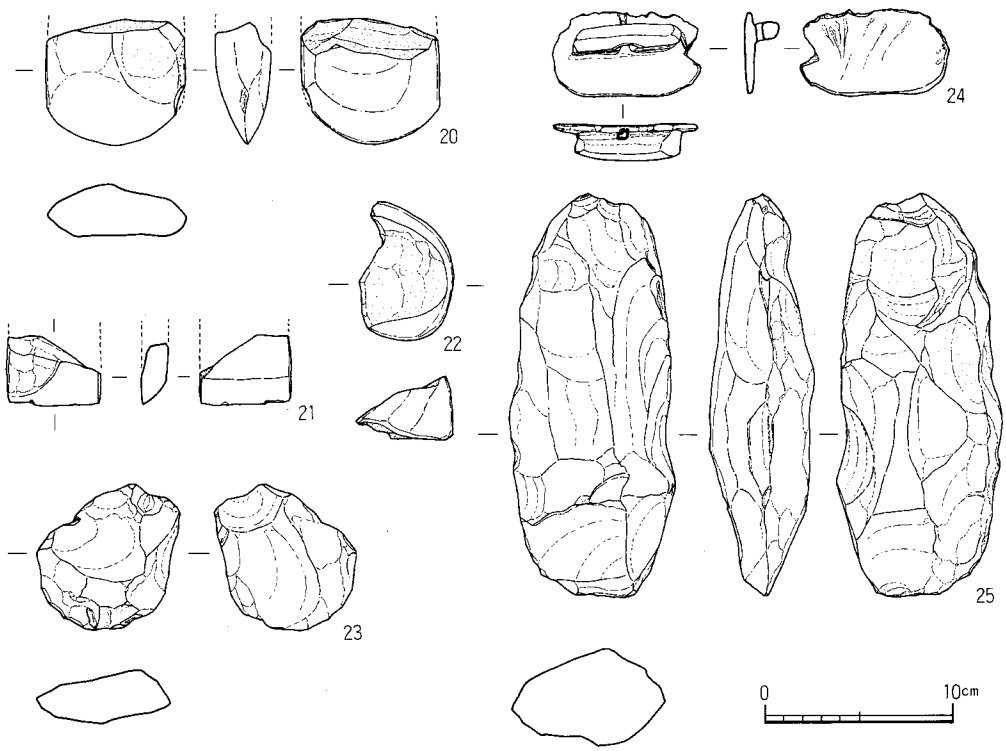


Fig. 20. 溝遺構出土石器実測図（1/4）

に大きく屈曲して東流し、東側の谷へと繋がる。その構造上からして一連のものと考えられるSD－03とは北西隅に８mの距離をおいて矩形に繋がり、内側に空間域をつくる。断面形は緩やかなU字状をなし、外側はやや急峻であるが、内側は緩やかに立ち上がる。

出土遺物（Fig.19・20. PL.10）

13は底径5.5cmの弥生土器の甕で胴部は反り気味に立ち上がる。14は底径6.8cmの白磁碗。釉薬は半透明の薄い灰色を呈し、見込みに露台の砂痕が残る。15は底径が9.2cmの青磁壺。胎土は細かい灰色で、釉薬は不透明な黄灰色をなす。畳付は釉を削り取って露台としている。16は瀬戸焼の壺である。胎土はやや粗い淡白色で、灰釉を施す。紐作りのため成形時の凹凸がある。

23は玄武岩製石斧の未製品で、現長7.8cm、幅7.6cm。24は滑石製石鍋の把手を再利用した模造品である。石鍋の破砕後に四周を磨いて面取りして作り出す。長径は7.7cm、短径は4.6cm。

SD－03（Fig.18. PL.1）

本溝は、調査区の北部を東流する幅２m以上の溝で、東端は谷に注ぐ。SD－02とは西北隅で陸橋状の空間をもって矩形に繋がり、SB－01～09の建物址群を内包する。

出土遺物（Fig.19・20. PL.10）

17は土師器皿で、口径9.8cm、底径7.2cm、器高1.5cmを測る。口縁部は内弯気味に短く外反する。18は龍泉窯系の青磁碗で、底径は５cmを測る。胎土は精良な灰白色で、半透明なきみのオリーブ色の釉薬をかける。つば皿の可能性もある。

25は粗割り整形した太型蛤刃石斧の未製品で、長さ21.4cm、幅8.8cm、厚さは5.1cmを測る。

SD－04（Fig.18. PL.1）

調査区の東端を谷に沿って南北流する溝で、SB－05・06、SD－03よりも新しい。溝幅は１～1.

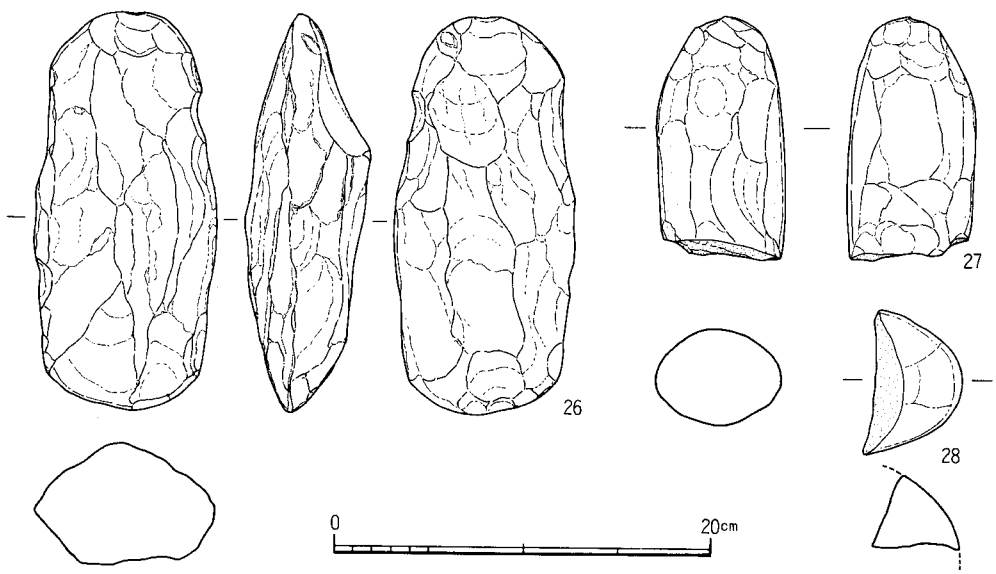


Fig. 21. 包含層出土石器実測図（1/4）

5m、深さは25cmを測り、断面形は緩やかなV字状をなす。

SD－05（Fig.18. PL.1）

本溝は、調査区の北西端にある。溝は長さ8.5mで、北端はL字状に西へ屈曲して短く延びる。溝幅は60～120cmで、断面形はU字状をなす。溝の屈曲部には拳大の転石が散乱していた。

出土遺物（Fig.19. PL.10）

19は龍泉窯系青磁碗。釉薬は半透明なきみの薄いオリーブ色で、見込みにスタンプ文がある。

5). 包含層出土の遺物

調査区には暗茶褐色の遺物包含層が5～20cmの厚さで堆積していた。包含層中には弥生土器、土師器、須恵器片が含まれるが、量は少なく小片が多い。また、石斧の未製品に混じって玄武岩のフレークとチップ類が検出された。原材を産する今山の縁辺に立地する所以であろう。

出土遺物（Fig.21. PL.10）

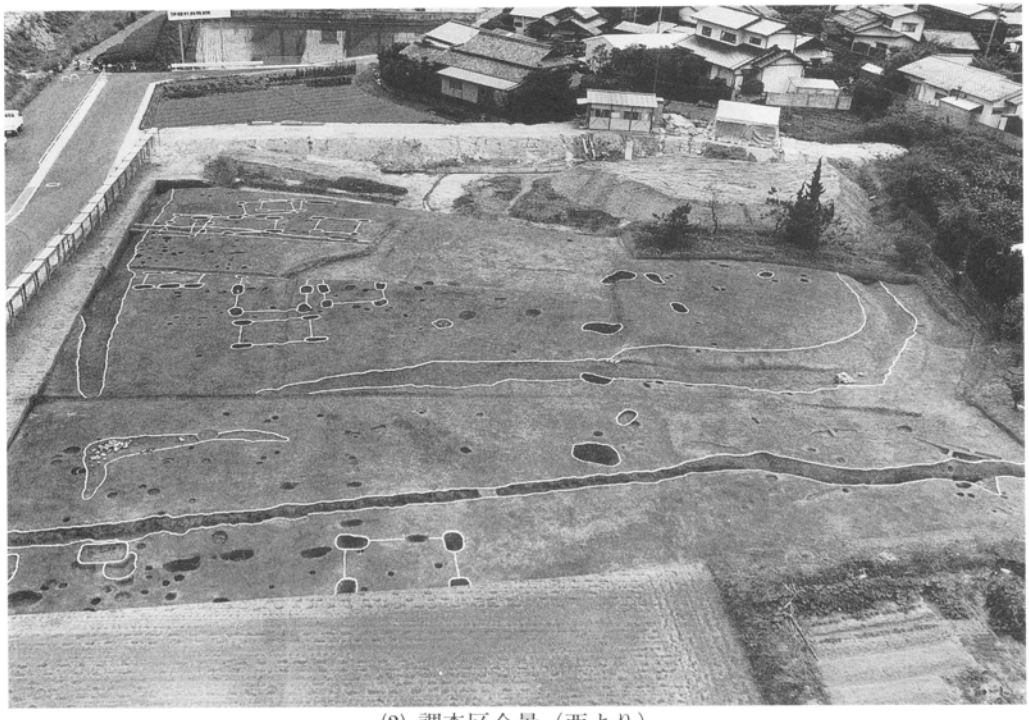
26・27は玄武岩の蛤刃石斧未製品である。26は長さ21.2cm、幅9.6cm、厚さ6.8cmで、粗整形の敲打が両側縁から加えられている。27は現長13.1cm、幅6.9cm、厚さ5.2cmを測る。玄武岩を粗整形した後に面取りして形を整え、一部に磨ぎを加えている。28は敲打石の破片資料である。

III. おわりに

青木遺跡の第2次調査では、弥生時代の竪穴住居址(1)、井戸址(2)と中世の井戸址(2)、掘立柱建物址(10)、土壙(7)、溝遺構(5)等を検出した。そのうち主体をなすものは中世の掘立柱建物址と溝遺構であろう。掘立柱建物址は大きく東西の2群に分かれる。このうち9棟からなる東側の一群は、幅約4mの大きな濠状の溝によって囲まれる。この溝は、「コ」字状の矩形をなし東側は貫入する谷に注ぎ込み天然の濠となっている。溝は北西隅が幅約8mに亘って途切れる。溝の両端部が浅く立ち上がっていることから削平による消失ではなく、陸橋状の出入り口部としての機能を本来的に備えていたものと考えられる。この溝によって内包された空間域は東西約32m、南北約42mで総面積は1,350m²になる。その棟方向からII期に分け得る9棟からなる掘立柱建物址群は、この空間内の北半部にまとまって分布し、南半部は広場的空間域を構成する。時期的には、矩形に巡る溝が13～14世紀に比定され、建物址群も消極的ながら13世紀代以降の年代が与えられよう。一方、調査区の西端には、幅約10mの距離をおいて矩形に巡る溝に並行するV字溝がある。その中には東側の一群と棟方向を同じくする建物址があり、この溝が建物址群を取り囲む可能性もなくはない。近接する青木遺跡の第1次調査区や今宿五郎江遺跡でも13世紀代に比定される建物群が検出されているが、溝によって区画されたものは明らかでない。これは本調査区例が中世初めにおける集落構成の在り方として一般的ではないのかも知れないが、該期の集落構成を考える上で好資料となるものであろう。

P L A T E S

(1) 調査区全景（北より）

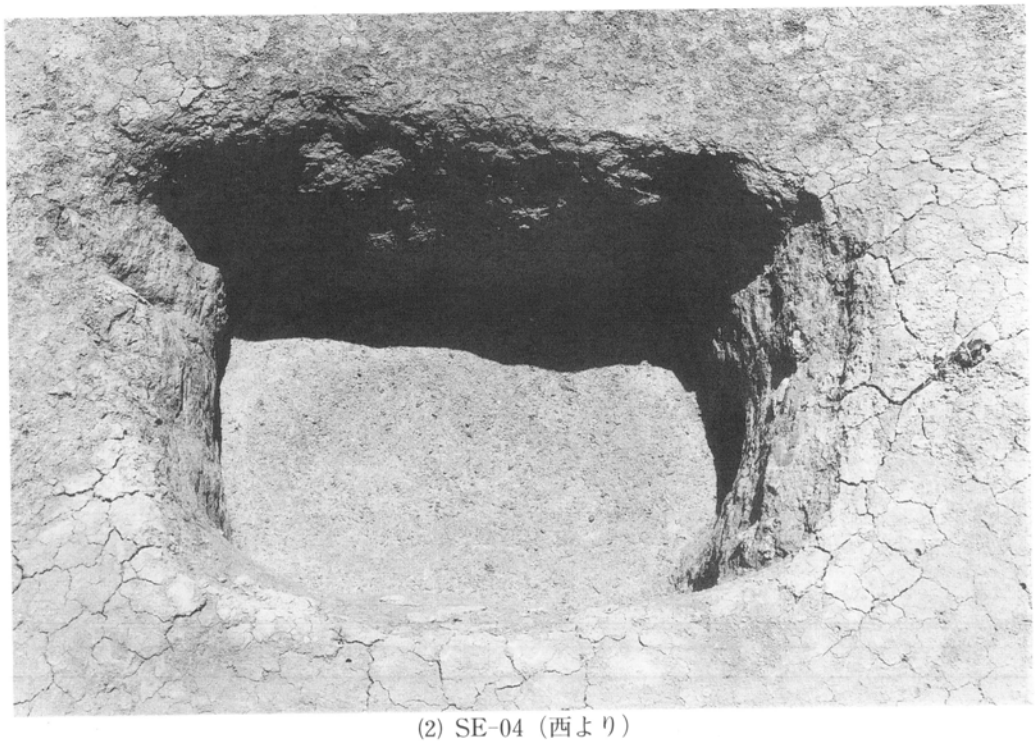


(2) 調査区全景（西より）

(1) SE-02（西より）

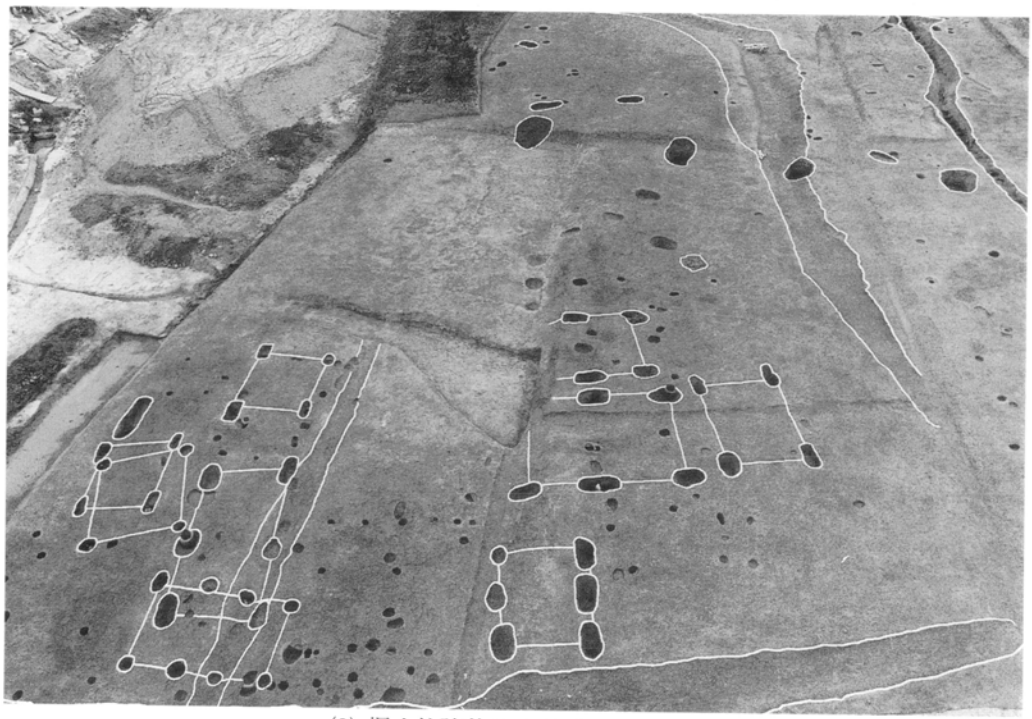
(2) SE-03（北より）

(1) SE-01遺物出土状況（西より）

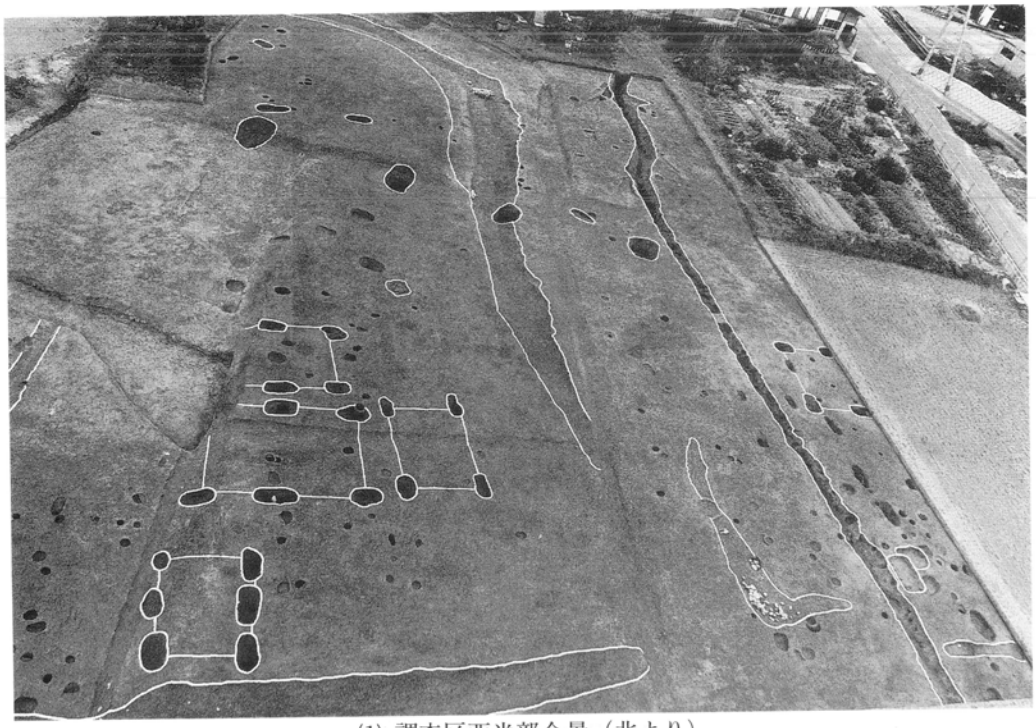


(2) SE-04（西より）

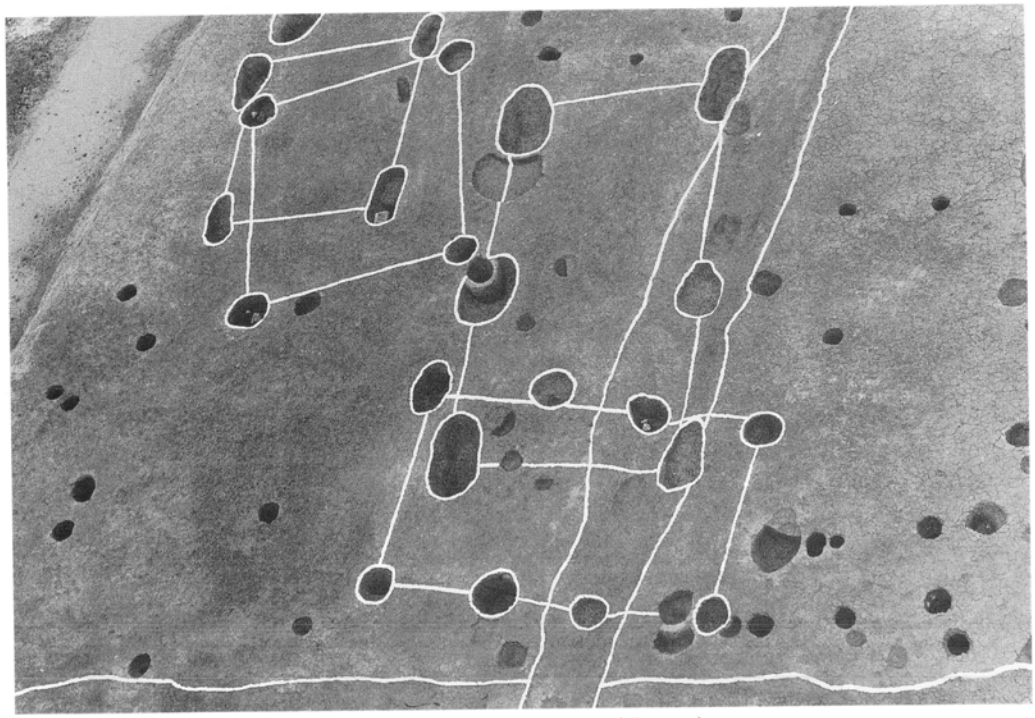
(1) SC-01（北より）



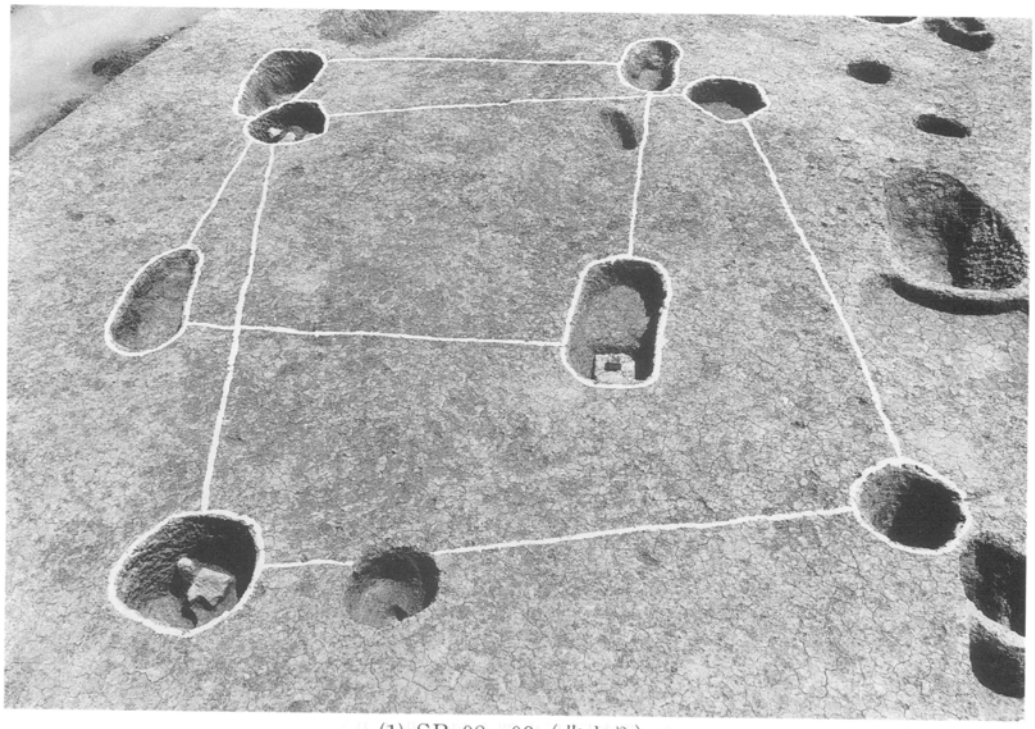
(2) 掘立柱建物址群全景（北より）



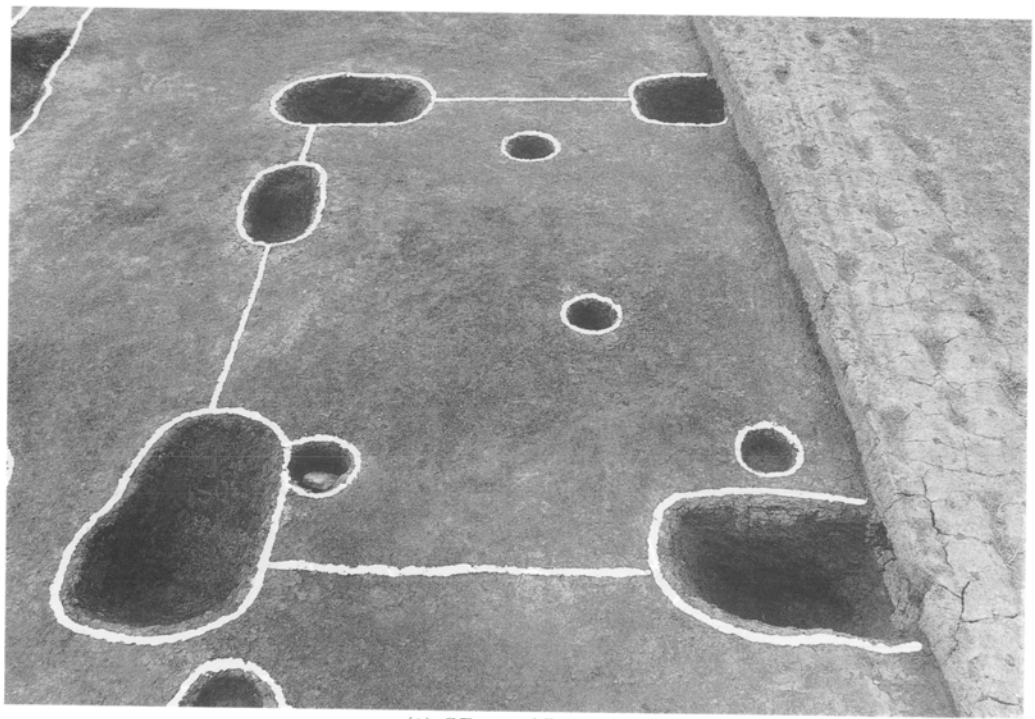
(1) 調査区西半部全景（北より）



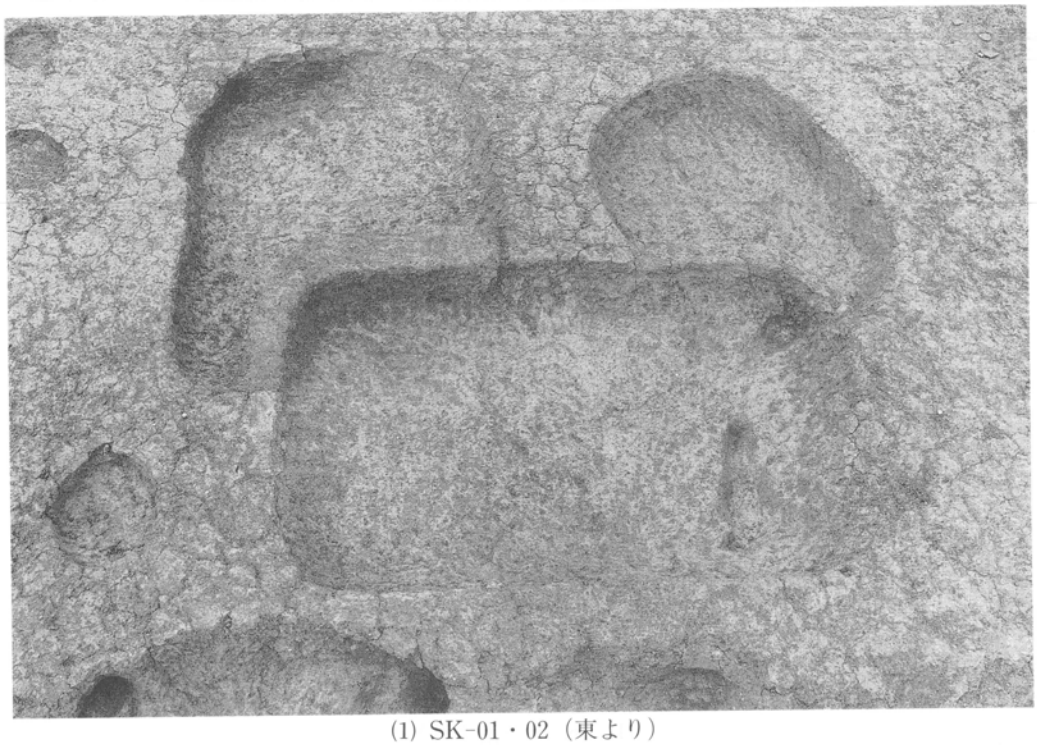
(2) SB-05・06・08・09（北より）



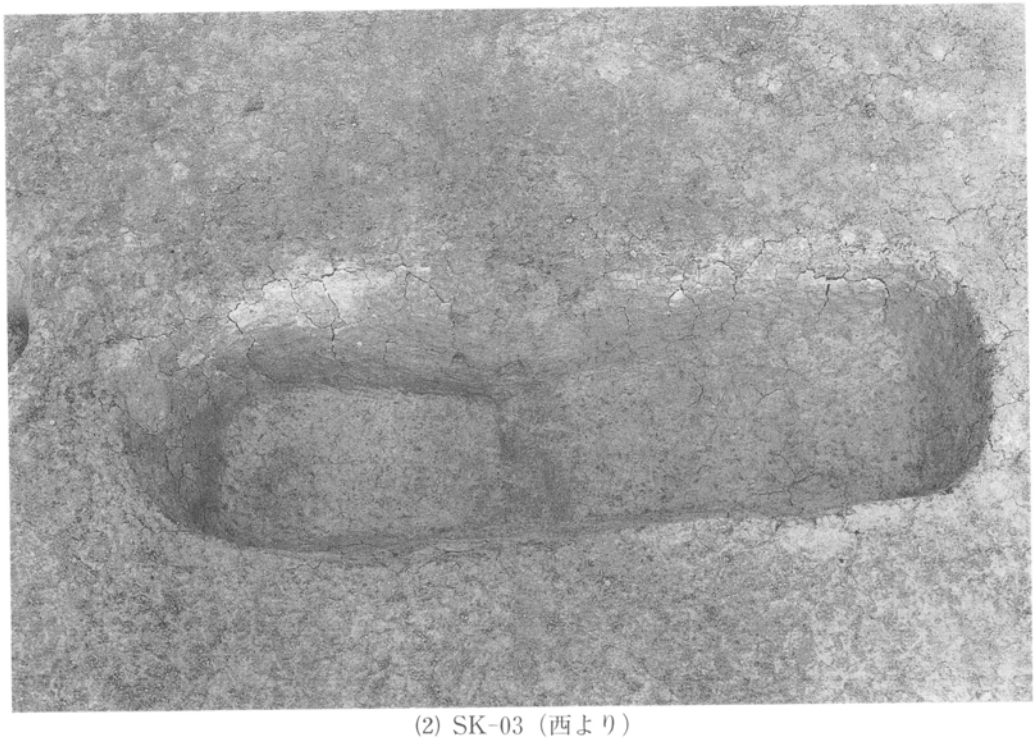
(1) SB-08・09（北より）



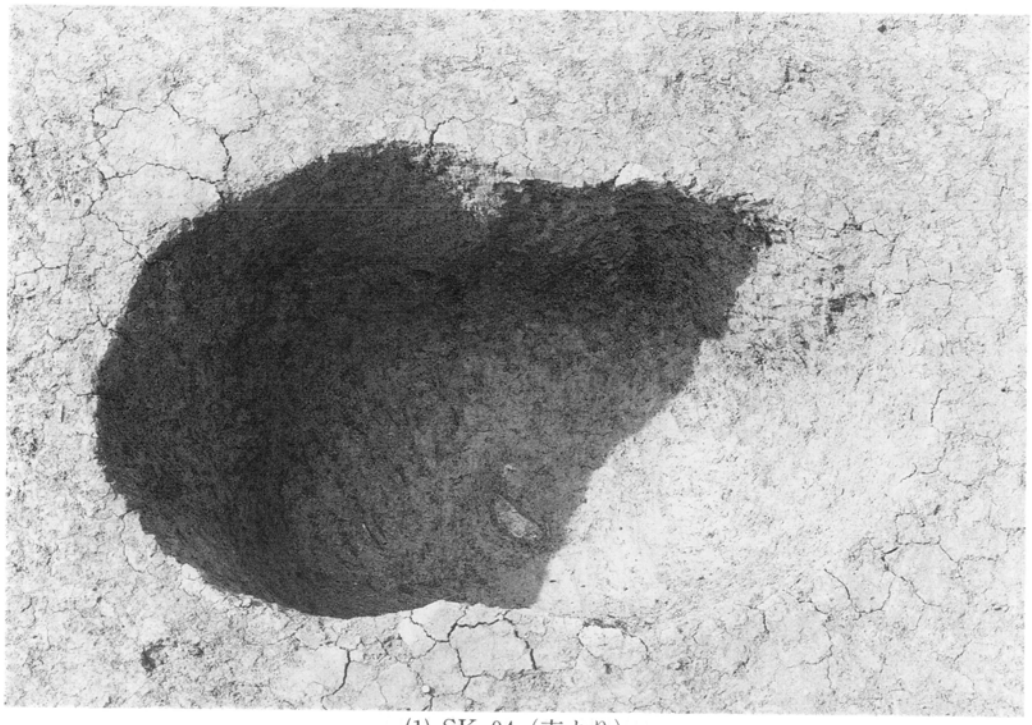
(2) SB-10（北より）



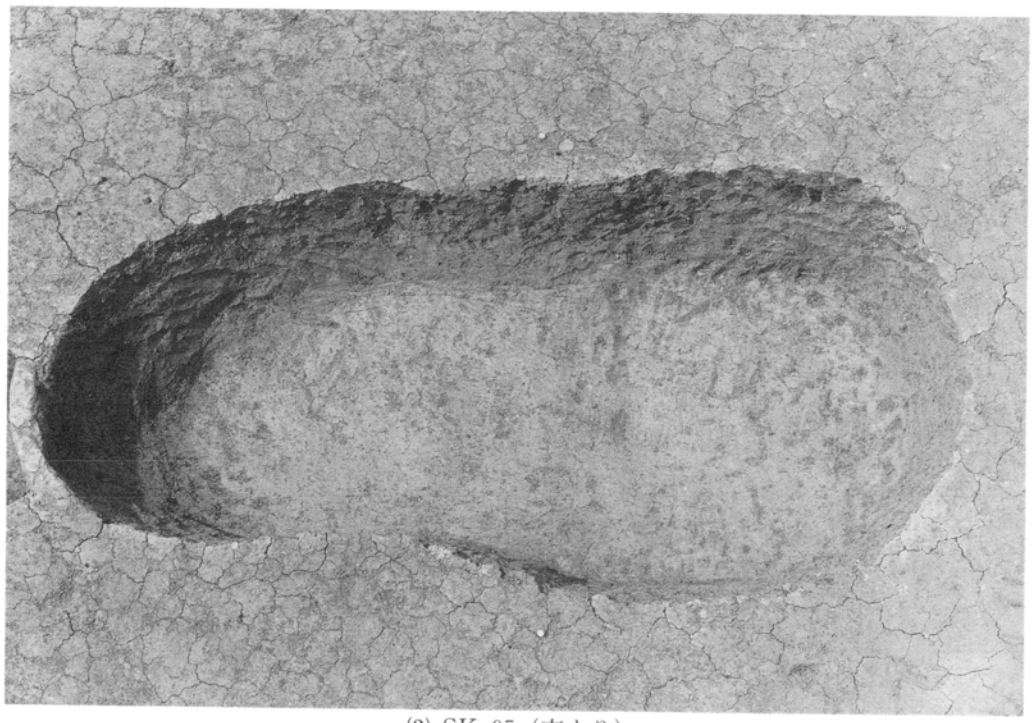
(1) SK-01・02（東より）



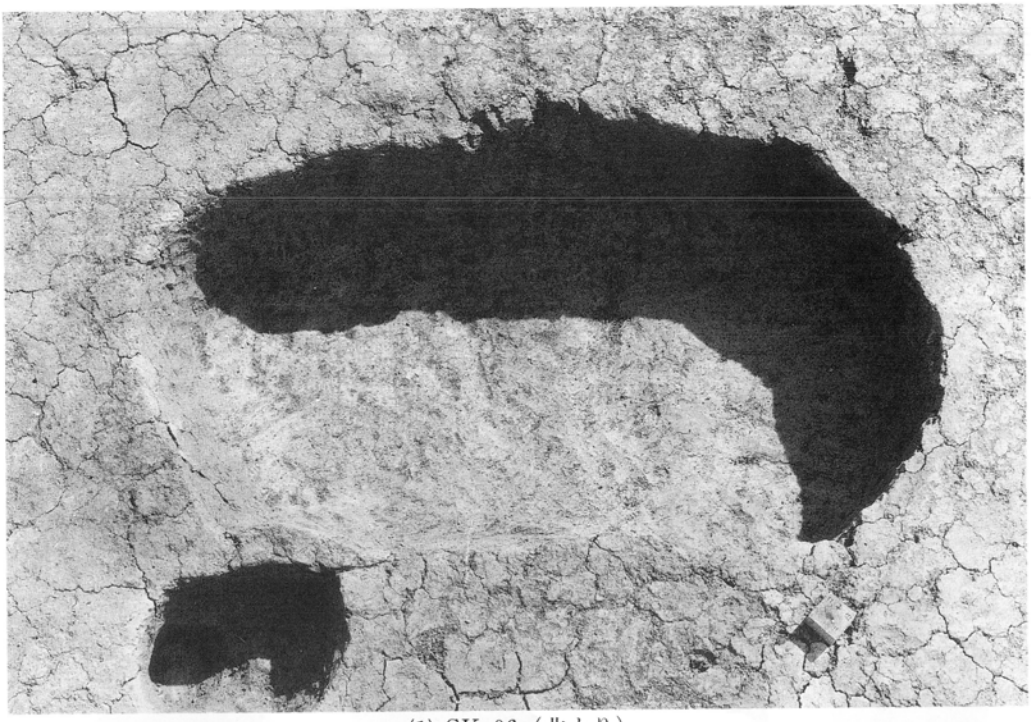
(2) SK-03（西より）



(1) SK-04（南より）

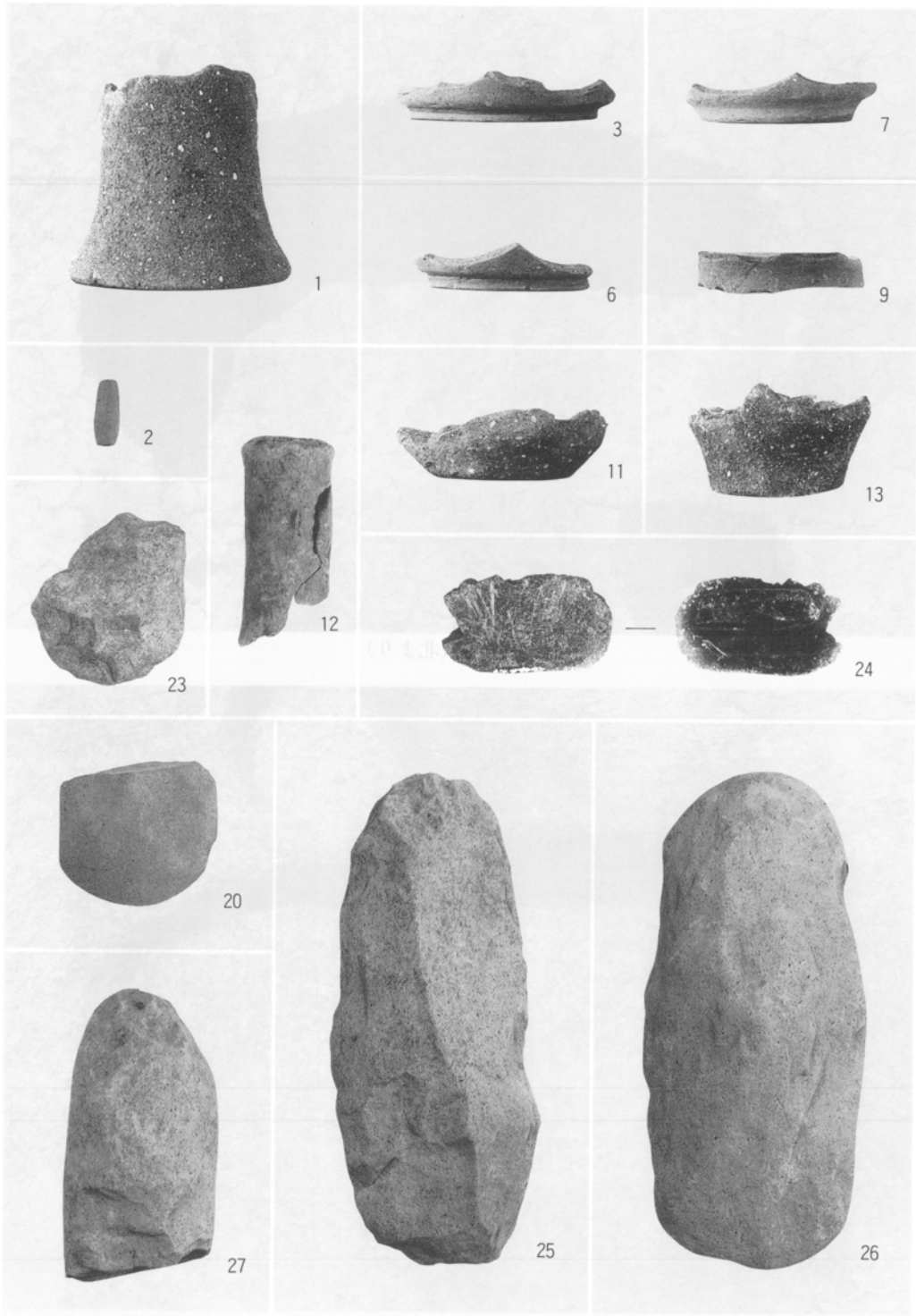


(2) SK-05（南より）



(1) SK-06（北より）

(2) SK-07（北より）



(1) 出土土器・石器・土製品

青木遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第350集

1993年3月31日発行

発 行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1－8－1
印 刷　西日本新聞印刷